

困った時に
すぐ役立つ



ほんの少し
変えるだけで
うまくいく

～ 学校あるあるヒント集 ～

実践事例集

高知市教育委員会

はじめに

高知市教育委員会は、昨年1月に「あったか学級づくりアドバイザー」からの指導助言をまとめ『ほんの少し変えるだけでうまくいく～学校あるあるヒント集～』を刊行いたしました。本書は先生方が学級経営や授業づくり、個別対応で困ったときに、難しい理論を学んだり、新しいスキルを取り入れたりしなくても、本を開いたらすぐに「これやってみよう」と思えるような、今までのやり方をほんの少し変えたり、工夫したりするだけでできることを提案したものです。

しかしながら、現場で毎日忙しく働いている先生方、特に経験の浅い先生方はこの本を手にとって開くという余裕さえない毎日だと思います。そのために、うまくいかないことがあってもどう対応していいのか分からずに、うまくいっていないにもかかわらず同じ対応を繰り返し行い、行き詰まっているという状況を耳にすることもあります。

そこで本年度は、初任者・2年経験者・3年経験者の研修対象者の先生方に本冊子を活用することを研修課題として位置づけました。1学期の研修の場で趣旨を伝え、学級経営や授業などの場面で困った際に、実際にこの冊子を使って実践し、効果はどうだったのかも含めて記録に残してもらいました。対象者は198名、全部で471の実践事例が集まりました。夏季休業中に行われた研修会当日には、参

加した先生方が付箋をびっしりと貼った冊子を持ち寄り、お互いの実践を熱心に交流する姿を見ることができました。

さらに、交流した後には実践の内容と、それによって変容した子どもの姿や学級の様子、そして先生方自身の振り返りを自らでタブレット端末に入力してもらいました。

このたび、刊行いたします『ほんの少し変えるだけでうまくいく～学校あるあるヒント集～ 実践事例集』は、初任者・2年経験者・3年経験者研修の悉皆対象者の先生方が実践した内容と振り返りから生まれた冊子です。集まった471の実践事例は、まだ経験の浅い先生方が対応に困ったときに『ほんの少し変えるだけでうまくいく』の冊子を開き、ヒントを得て、自分なりに工夫を加え、試行錯誤しながら実践した努力の結晶です。まさに高知市の教育の未来を創る原動力となるものだと言えるでしょう。

これからの高知市の教育を支えていく若い先生方の実践を集めた本書が、現場で苦戦している先生方の日々の教育実践に役立ち、さらに、各学校の教育活動の充実につながることを願っております。

令和5年1月

高知市教育研究所長 西田 尚弘

この本の使い方

※ この本を読むときは、『ほんの少し変えるだけでうまくいく～学校あるあるヒント集～』を準備してください。



先生の困りごと

『学校あるあるヒント集』の困りごと番号と同じです。



実践ポイント

実践事例のポイントとなる項目です。気になるポイントにはチェックを入れましょう。



実践事例

実践の詳細です。『学校あるあるヒント集』を参考にアレンジを加えているものもあります。



子どもの反応

実践後の反応や変化を記載しています。



先生の感想

実践を通して得られた先生方の感想や手応えです。

26

実践報告数

実践報告数です。学校種・学年関係なく記載しています。

3 私語が多い学級



実践ポイント

- 強化と弱化・認める指導の合わせ技
- 時間を意識「おしゃべりタイムは1分間」
- ミニテストは静かな教室づくりの効果大

実践事例



強化と弱化・認める指導の合わせ技

授業中でできている子どもには「いいね」という認める言葉がけ。私語をしている子どもに対しては毎回注意するのではなく、適宜スルー。2分間で集中できている時間があつたら「さすがだね。かっこいい」



認める指導を行ったタイミングで、それまでできていなかった子どもは、「あ！今これをする時間か」と気付いて取り組み始めた。すてに取り組んでいた生徒たちも集中力が上がり、私語が減った。

注意したり叱ったりする回数が減った。しかし弱化だけでは不十分な部分があるので、できている子どもや望ましい行動をしている子どもを意図的に取り上げ、認める声かけを行った。強化と弱化を組み合わせ、認めるだけでこんなに変わるのだと驚いた。



時間を意識「おしゃべりタイムは1分間」

「おしゃべりタイムをとります！1分間とるので好きなことをたくさん話していいよ」と電子黒板にタイマーを表示。



おしゃべりタイムの間にたくさん話すことができた子どもは、タイマーが鳴ると自然に静かになることができた。何回かおしゃべりタイムを取り入れていくと、だんだんおしゃべりタイムがなくても授業が始まると切り替えできるようになった。

注意をしなくても自然に静かになることができて、教師のストレスもなくなった。おしゃべりタイムをとるときにはタイマーなどを用いて時間を明確にすることが大切だと感じた。時間を区切ることで子どもも話す時間と聞く時間のメリハリを意識して活動できた。

小 中 実践学校種

実践事例があった学校種です。報告はなくても参考になると思われる事例については学校種を追記しています。

ちょっと残念！

実践について、子どもの反応や実践者の手ごたえが無く、実践の自己評価が低かった事例の中で参考になるものを記載しています。

どこに問題があったのか、何が足りなかったのかなど、考えながら読んでみましょう。

Good Point!

実践報告を受けて、よかった点や更に考えてほしい点を記載しています。実践に取り組んだ先生方へのエールです。

新たに実践しようとする先生もぜひ参考にしてください。

※ 実践事例は類似した内容を合わせて記載している場合があります。また、掲載にあたり一部表現を改変している場合があります。

目次

はじめに	2
この本の使い方	4

第1章 授業場面の困りごとへの実践事例

1 授業が成立していない学級	12
2 指示が通らない学級	14
3 私語が多い学級	16
4 教師の話が聞けない学級	18
5 マイナス発言の多い学級	20
6 雰囲気を壊す行動をする子に我慢している学級	22
7 学習規律が身に付かない学級	24
8 集中して学習することが難しい学級	26
9 意欲が低い・無気力な学級	28
11 授業の邪魔をする・妨害する子	30
12 授業中にケンカをする子	32
13 何に対しても反抗する子	34
14 注意に逆切れする・反抗的な態度の子	36
16 授業中寝る・机に突っ伏している子	38
17 取りかかりに時間がかかる子	40
18 ノートに書くことが苦手な子	42
19 苦手なことは「やりたくない」と言う子	44
20 手遊び・文具遊びをしている子	46
15 教師の注意の言葉をマネする子	48

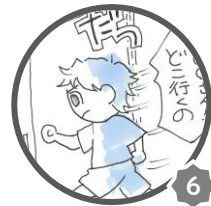
第2章 対人・生活場面の困りごとへの実践事例

23	気に入らない子に対して暴言をはく子	52
25	友達にきつい言葉で命令する子	54
28	忘れ物が多い子	56
29	整理整頓が苦手な子	58
30	掃除をしない子	60
21	陰口を言う子	62
22	特定の子どもを無視する子	63
24	教師に対して暴言をはく子	64
27	暴力をふるう子	65
●	コラム ● ニーズが高まる学校あるあるヒント集の反響	66

第3章 個別・情操面の困りごとへの実践事例

32	常に身体が動いている子	70
33	イライラして物を投げる子	72
34	注意したときにいつまでもすねている子	74
35	奇声・大声を出す子	76
36	調子に乗りすぎて周囲から距離をとられる子	78
37	待つことができない子	80
42	被害者意識が強い子	82
44	人との関わりが苦手で孤立気味な子	84
47	自分勝手な行動をする子	86
48	授業中に立ち歩く子	88
49	教室を飛び出す子	90
52	自己肯定感が低い子	92
55	甘えたがる子	94

38	手や文具をなめる子（周りが嫌がるのを見て喜ぶ）	96
40	物を窓や階段から落とす子	97
41	突然パニックになる子	98
45	「また〇〇かよ」など不平不満が多い子	99
53	大人不信・教師不信の子	100
●コラム● 「ほんの少し変えてみた」あるある項目トップ10		101
おわりに		102
実践提供者		104
作成者		104



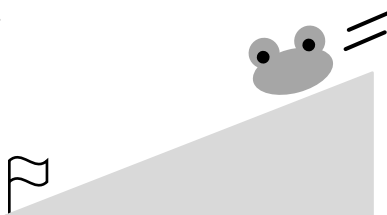
指導から支援へ



「子どものゴール」

ほんの少し変えてみる

を



実践ポイント

- まずはスタートの5分間が大切
- 全員が自我関与できる活動
- 教師の話す時間を減らし子どもの活動を増やす



実践事例 三

✓ まずはスタートの5分間が大切

小

「チャイムが鳴ったら終わるから、チャイムで始められるよう頑張ろう」
 課題設定は語尾を「~しよう」から「? (疑問形)」へ。
 映像を用意して視覚的に子どもを惹きつける。
 指示は1回に一つ。



チャイムと号令の差が少しずつ縮まってきた。
 「? (疑問形)」にすることで解決しようと考えを広げる
 子どもが増えた。

電子黒板に指示を出しておき、短時間で活動できるように
 したい。机の上の整理整頓や学習規律をしっかり整えること
 も大事。



✓ 全員が自我関与できる活動

小

「せ~の」の合図で、全員がグー (賛成意見), チョキ (分からない), パー (反対意見) の意思表示。



発表する子どもが固定化していたが、なかなか発表しなかつた子どもが挙手するようになった。

みんなが生き生きするようになってうれしい。



**教師の話す時間を減らし子どもの活動を増やす**

小 中

ストップウォッチを持って教師がしゃべっていた時間を計測。

目標時間を設定し、しゃべる時間を意識して減らす。

ペア活動を取り入れ、子どもが活動する時間を増やす。



ペアでの学習に積極的に参加するようになった。
活気にあふれてきた。

手や体全体を動かして活動しながら学びを得ることができ
るような授業をしたい。

**Good Point!****セルフモニタリングできる教師は成長できる**

教師の話している時間を計測することで、自分の話している時間を客観的事実として把握し、自らの指導のあり方をセルフモニタリングしているところがすごいなと思いました。

指示の出し方を変える、教師の話す時間を減らす、全員が意思表示できる場面を取り入れるなど、様々な工夫をすることで子どもの姿が変わってきている様子がよく分かります。

学級経営や授業がうまくいかない場合に、うまくいかないことを子どものせいにするのではなく、自分自身の指導行動を変えることのできる教師は、「できる教師」「成長する教師」になるはずですよ！





実践ポイント

- 先生との秘密の合図
- 視覚支援を効果的に
- 指示はシンプルかつ短く
- 音と動作の合わせ技



実践事例 三



先生との秘密の合図

小

「先生との秘密の合図を決めよう」と話し、その子どもの好きなピースサインに決める。教師がその合図をしたときには話を聞くことを約束する。



ピースサインを意識して話を聞くようになった。

「秘密」という言葉は特別感があり、どの子どもにも響くのではないと思う。



視覚支援を効果的に

小

中

指で数字を出して、その数を子どもに言わせる。

指示は黙って黒板に書く。

黒板の今やっている個所に磁石を貼り現在地を示す。

ジェスチャーやイラストを使って指示を出す。



教師の示す指の数を言って集中することで、静かに活動できることが増えてきた。

周りが静かになり集中し始めることで、騒いでいた子どもが雰囲気の変化を感じ前を見るようになった。

できている子どもを褒めることで他の子どももできるようになった。

友達に尋ねることが苦手な子どももいるので、黒板に書くことは効果的。

注意したり叱ったりして学級の空気が悪くなっていたが、ゲーム感覚で指示が聞けるようになった。



**指示はシンプルかつ短く**

小 中

指示は肯定的で端的に。
箇条書きのようなシンプルな指示。
指示を出す前に「はい」の一言で注目。



次に何をすればよいのかを聞く子どもが少なくなった。

端的に伝える習慣が身に付き、指示が通りやすくなった。

**音と動作の合わせ技**

小

手拍子しながら、教師が「みーなーさん」子どもは「はあい」
教師「かっこいい姿勢！3・2・1！」子ども「ピタッ！（よい姿勢になる）」



合言葉化することで子どもが意識して動けるようになった。ピタッ！と揃うことが気持ちがよいみたいで、喜んで姿勢をつくるようになった。

低学年は言葉遊びや手遊びが大好きなので、幼児期の体験を生かした合図を用いると効果的だと感じた。

**Good Point!****自ら気付ける合図で信頼関係づくりもできて一石〇鳥の技**

共通の合図を作ったり、子どもと二人だけの秘密の合図を考えたりすることで、自ら気づき指示が聞けると同時に担任の教師との信頼関係も深まり、「この学級、楽しいな」と思える子どもが増える、まさに一石〇鳥にもなる取組だと思います。

また、体を動かすことで、耳からの情報だけではなく、身体感覚として自然に指示を聞く態度が身に付き、更に「全員がそろう」ことは「気持ちがよいこと」と感じる子どもたちに育っているところが素晴らしいですね。



実践ポイント

- 強化と弱化・認める指導の合わせ技
- 時間を意識「おしゃべりタイムは1分間」
- ミニテストは静かな教室づくりの効果大



実践事例 三



強化と弱化・認める指導の合わせ技

小 中

授業の中でできている子どもには「いいね」という認める言葉がけ。
私語をしている子どもに対しては毎回注意するのではなく、適宜スルー。
2分間でも集中できている時間があつたら「さすがだね。かっこいい」



認める指導を行ったタイミングで、それまでできていなかった子どもは、「あ！今これをする時間か」と気付いて取り組み始めた。すでに取り組んでいた生徒たちも集中力が高まり、私語が減った。

注意したり叱ったりする回数が減った。しかし弱化だけでは不十分な部分があるので、できている子どもや望ましい行動をしている子どもを意図的に取り上げ、認める声が行った。強化と弱化を組み合わせ、認めるだけでこんなに変わるのだと驚いた。



時間を意識「おしゃべりタイムは1分間」

小 中

「おしゃべりタイムをとります！1分間とるので好きなことをたくさん話していいよ」と電子黒板にタイマーを表示。



おしゃべりタイムの間にたくさん話すことができた子どもは、タイマーが鳴ると自然に静かになることができた。何回かおしゃべりタイムを取り入れていると、だんだんとおしゃべりタイムがなくても授業が始まると切り替えができるようになった。

注意をしなくても自然に静かになることができて、教師のストレスもなくなった。おしゃべりタイムをとるときにはタイマーなどを用いて時間を明確にすることが大切だと感じた。時間を区切ることで子どもも話す時間と話を聞く時間のメリハリを意識して活動できた。



✓ ミニテストは静かな教室づくりの効果大

小

算数の時間の始めは計算50問。一発で100点だったらシール。終わったら紙の裏にお絵かき。

授業の最初の5分間でミニテストや漢字ワーク。



静かに集中して取り組む姿が見られ、落ち着いて授業に参加できる子どもが増えた。

私語をせずに過ごす時間ができて、話合いの時間と話を聞く時間のメリハリがつくようになった。

子どもによって課題を工夫する必要があると思う。教師の「静かな教室が好きだな」の一言も大切。活動する時間の見直し、発問や子ども同士をつなぎ方なども意識していきたい。



👂 時間の管理を怠ると…

小 中

おしゃべりタイムを取り入れる。



おしゃべりが好きな子どもはずっと話し続けてしまっ
て…。

時間の設定を明確にしなかったために、ダラダラと話し続ける子どもがいた。時間の設定を明確にして、タイマーなどで子どもが時間を意識するように取り組むことが大切だと思った。



Good
Point!



静かな時間（例外）を広げる

いつまでもおしゃべりの止まらない学級に必要なことは、きっとメリハリをつけることを学ぶことなのでしょう。1分間のおしゃべりタイムをとることで時間を意識するようになり、もの見事におしゃべりタイムをとる必要がなくなったというのは、まさにその成果です！

静かに過ごせることができたら、次はその例外を増やすこと。どうしてできたかの成功の責任追及も大切です。



実践ポイント

- 聞けている子どもにハンドサイン
- 聞き方名人になるには、まずは聞く練習から
- 数字を使った指示は簡潔かつ具体的に



実践事例 三



聞けている子どもにハンドサイン

小

話が聞けている子どもにはOKサインやグッジョブサイン。
子どもと一緒にハンドサイン（手をグーにしたら静かに前を見る）を考える。
教室の仲間「うさこちゃん」人形で注目を集める。
まねっこ手遊び。時には難しくしたり早くしたりする。



意識して前を見る子どもが増えた。静かにして欲しいときに子どもがグーをするようになった。何度も指示をしないできなかった子どもたちが、集中して聞こうとしてくれるようになった。メリハリをつけることで能力が高い子どもも飽きずまねっこ手遊びをして、楽しみながら話を聞く姿勢をつくることができた。

リズムを変えたり、かけ声を変えたりすると高学年でもできたことがよかった。



聞き方名人になるには、まずは聞く練習から

小 中

話をしている人の方に身体を向けて聞くと、向けなくて聞くとではどちらが気持ちよく発表できるのかをロールプレイ（役割演技）で体験する。

「聞き方名人」のプリント（『学級経営ハンドブック』掲載）を教室に掲示。
五つの大切なことを1日に一つずつ確かめて意識させながら聞く練習を行う。
聞く姿勢の練習（手はひざ、足ペタ、背筋ピン）をする。



促さなくても身体の向きを意識して聞こうとする子どもが増えた。うなずいて話を聞く子どもや教師の方を向いて話を聞く子どもが増えた。

学習規律の確認の大切さを感じた。スモールステップで聞き方を身に付けさせることができたのがよかった。話をする前に注目させることは効果的だった。楽しみながら話を聞く練習をし、ルールをしっかり確認したい。



**数字を使った指示は簡潔かつ具体的に**

小 中

「今から1分間話します」「今から三つ説明します」など数字で具体的に示す。

黒板やホワイトボードに伝達事項を書き、視覚支援も併せて行う。

「大事なことから1回しか言わないよ」と念を押す。



最初に注意喚起することで、話し手に集中することができ、前を向いて話を聞ける子どもが増えた。

活動と聞く時間のメリハリが付き、子どもの反応やうなずき、返事が増えた。

「聞ける」状態ができるまでの時間が非常に短縮された。

話を聞かなければいけないという雰囲気づくりができた。
もう少し短く明確な指示ができるよう、指示の出し方を工夫していきたい。

できたことに対するボイスシャワーや成功の責任追及をしていきたい。

同じ話を繰り返してしまうことを無くし、簡潔に話すようにしていきたい。

「尋ねればいつでも教えてくれる」から「聞いていなければ自分が損をする」に。

**Good Point!****「楽しみながらやる」ことで続けられる**

どの実践も「これなら私もできる!」とすぐにやってみたくなるものばかりです。「聞きなさい」「静かにしなさい」を繰り返すのではなく、ハンドサインをしたり、指人形を使ったり、ほんの少しの工夫で教室の中に「友だちの話を聞こう」という空気が醸し出されている様子が手に取るように分かりました。

また「聞き方名人」になるための練習という発想もすごいと思います。指示や禁止ではなく「楽しみながらやる」という「ほんの少し変えるだけでうまくいく」のコンセプトが感じられます。



子どもの言い分を聞き、Iメッセージで受け止める

小 中

「私は〇〇して欲しいんだけど、できるかな？」

「さっきの言葉。私は悲しい気持ちになったな。どうして分かる？」と問いかけ、考えさせ、最後に「だから〇〇してほしかった」と伝える。



渋々ではあるものの、教師の話に聞こうとした。

まわりの子もたちから「確かにそうかも…」 「マイナスの発言は人を傷つけるよね」との声が聞かれ、納得する空気が感じられた。

マイナス発言を受け止めるには教師の心に余裕がいる。マイナスの気持ちも（教師は）受け止めてくれるんだと子どもが気付けたことはとてもよかったと思う。

教師が「〇〇して欲しい」「〇〇のような行動がとれるようになって欲しい」と伝えることはとても有効だと思った。



Good Point!



マイナス発言は未学習か誤学習

子どもの発言を否定するのではなく、まずは受け止めて、それからIメッセージで「先生は〇〇してほしい」ということを伝える。これは教育相談の基本中の基本ですが、実践はなかなか難しいのが実情です。それを忠実に実行できていることが素晴らしい！

マイナス発言をしている子どもは、反対意見の正しい言い方をまだ学習していないか、間違った学習の仕方をしているかです。禁止や注意だけでなく、感情は否定せず行動に注目し、「どうすればよいのか」を一緒に学ぶ場を設け、ポジティブな声かけが心がけるなどは、ベテラン教師でも簡単にできることではありません。



実践ポイント

- モデルを示し頑張りカードやシールで自己肯定感アップ
- スモールステップのゴール設定
- 見方を変えて感謝の言葉を伝える
- 我慢している子どもへの声がけを忘れずに



実践事例 三

モデルを示し頑張りカードやシールで自己肯定感アップ 小 中

できている子どもを褒めて「がんばりカード」を用意してシールを渡すようにした。

できている子どもの名前を次々に言って頑張り伝える。

教師が「これくらいの声の大ききさで言うよ」「こんな風にするよ」とモデルを示す。



シールをもらえて喜ぶ姿が増え、マイナス行動が多かった子どもはプラスの行動が増えた。

「自分もやろう」と行動を変化させる子どもが増えた。

子ども同士でよいところ見付けの活動につなげたい。

名前を呼んでいる間にも行動を変化させる子どもが何人もいて、名前を呼ぶのが追い付かないという嬉しい事態になった。

教師がモデルになり、立ち居振る舞いを丁寧にすることが大切。その逆の影響の大きさも感じた。

スモールステップのゴール設定 小

少し頑張れば達成できるゴールを設定。花まる三つでシールがもらえる。



「どうせ自分は…」と言っていた子どもが花まるをもらって、好ましい行動が増えた。

行動の振り返りをするとき受け入れずに拗ねることが多かったが、スモールステップのゴールを設定することで頑張る姿が見えた。



✓ 見方を変えて感謝の言葉を伝える

小 中

一人一人の頑張りやよい行動に対して「ありがとう」「うれしい」などの感謝の気持ちを丁寧に伝える。

我慢している子ども（できている子ども）を褒める。「〇〇しよう」という肯定的な言葉がけを行う。



よい行動が増え、学級の雰囲気が明るくなった。
落ち着いて学習に取り組むことができるようになってきた。

気になる子どもを注意するのではなく、よい子どもを褒める意識は大切だと感じた。

一人一人に目を向けて細やかな手立てを講じていく。



✓ 我慢している子どもへの声がけを忘れずに

小 中

「分かる?」「困ってない?」「頑張っているね」などの声がけで、授業に取り組む姿勢を評価していることが伝わるように意識する。



黙々と課題に取り組む子どもが増えてきた。落ち着いて学習に取り組むことができるようになってきたが、まだ気分次第では否定的な発言や行動をしてしまう子どもがいる。

今後も頑張っている子どもの姿を見逃さず評価していきたい。



Good Point!



モデルを示して、あるべき姿を伝えることで学級全体の成長が期待できる

温かい雰囲気をつくる秘策の「モデルを示す」「認める指導を意識する」「ほんの少し頑張ればできるゴールを設定」の三つを、理論を踏まえて丁寧に実践されていることが伝わります。きっと「ほんの少し変えたこと」がいつの間にか「当たり前」になっていることでしょう。



実践ポイント

- そもそも、なぜ学習規律が必要？
- モデルとなる行動を具体的に褒め、広げる
- つまらないと私語や手遊びをしたくなる



実践事例 三



そもそも、なぜ学習規律が必要？

小 中

学習規律がなぜ必要なのか、そしてどうしたら守ることができるのかを子どもと一緒に考える。

決めたことが、すぐできるようになるのは難しいので、認めたり、「少しずつ頑張ろうね!」「応援しているよ!」と励ましたりする。



自分事と捉え、納得したことは守ろうとする姿勢が芽生え、子ども同士で声をかけ合う姿も見られるようになった。

1学期の始めに、学級の意識をいかに高めるかが肝心。言われたからするのではなく、なぜそうする必要があるのかを考えることが大事なんだな。教師が主語の「授業をしやすい学習規律」から、子どもが主語の「子どもが決めた学習規律」に!



モデルとなる行動を具体的に褒め、広げる

小 中

モデルとなる子どもを具体的に褒め、真似した子どもも褒めていくことで教室全体に広める。



褒められることはどの子どもも嬉しいようで、自分も頑張ろうと、望ましい行動の真似をする子どもが増えた。

Iメッセージの褒め方が効果的。次は「いいねカード」なども取り入れてみようかな。



✔ つまらないと私語や手遊びをしたくなる

小 中

教師が一方的にしゃべる授業ではなく、友だちの意見を聞き合うことで学びが深まる授業づくりを意識したり、同じレベルの問題の繰り返しでつまらないと感じさせないように、チャレンジ問題を用意したりするなど、授業に変化をもたせる。



授業に対して目的意識や次のステップへの意欲が見られる場面が増えた。

子どもたちが意見を聴き合える授業、意欲的に学べる授業をつくるのが大事だな。



👁️ 繰り返しの声かけが大事

小 中

チャイム着席や授業中の席立ちが減るように、今やるべきことや次にすることを明確にする。



まだまだ定着はしていない。

継続しつつ、声かけや効果的な指示について、もう少し探っていきたい。



Good Point!



自分たちで決めたことは頑張れる！

子どもたちが学習規律を自分事として考えられるように支援していることが素敵ですね。自分たちで考えたことは納得して、守ろうとするでしょう。モデルとなる子どもを褒めて学級全体に広げていくことも、自然によい学習環境をつくることにつながりますね。一般的に、低学年は、めいいっぱい褒め、年齢が上がれば、認める声かけにシフトしていくとよいといわれています。そして、上手くいかないことを子どものせいにせず、子どもに話を聞いて自分の授業を振り返ることができる教師は、魅力的な教師ですね。「今何をするか明確にする」ということは、一つの手立てとして有効だと思います。手立ては一つだけではなく、前述の支援や指導と合わせて行くと、効果が高まるでしょう。



実践ポイント

- 動きを取り入れる
- 発表のバリエーションを増やす
- 暇な時間をつくらないようにする



実践事例 三



動きを取り入れる

小 中

授業前のストレッチ、立って音読、ペア・グループ活動、立ったり座ったりする、前に出てくる等の活動を適宜取り入れる。



ボーっとしている子どもが減り、頑張って授業に取り組む子どもが増えた。

動きを取り入れることで、活動にメリハリがついて、子どもも楽しそう。少しの工夫で授業の雰囲気が変わるんだな。



発表のバリエーションを増やす

小 中

音読や発表の際に、意図的指名や列指名、意図的な挙手指名からの相互指名など、『ほんの少し変えるだけでうまくいく～学校あるあるヒント集～』のp.27を参考に行う。



発表スタイルのバリエーションが多くなることで、子どもは飽きずに緊張感をもつことができた。また、普段自分から発表しない子どもも発表できるようになった。

もっと色々な発表のバリエーションを増やして、状況に応じて使い分けられるようにしたいな。



✓ 暇な時間をつくらないようにする

小

課題が早く終わって飽きてしまうと他の子どもにちょっかいをかけたリ床に座り込んだりするので、課題が早く終わった後の行動を示す（別の課題をする、終わったら困っている友達にヒントを出す、黒板に書きに来る等）。



マイナスの行動が減ってきた。

もっと難しい課題を準備するなど、他にも色々な方法を試したい。



👤 授業に動きを取り入れたが…

小 中

様々な動きを授業に取り入れたり、自由交流を行ったりする。



少しは集中できているが、さほどの変化は見られない。

取り入れる動きや交流が、遊びになってしまうと意味がない。意図や教師の声がけを吟味する必要があるな。集中する授業ができたときに寝る方が効果的かもしれない。



Good Point!



集中するためのルーティーンをつくる

子どもを1時間の授業でずっと座ったままにさせるのではなく、授業の中で効果的な動きを取り入れたり、発表のバリエーションを増やしたりして、飽きさせないように工夫していることが素晴らしいですね。そして、同じように「動きを取り入れる」ことを行っても、上手くいく場合とそうでない場合があるのは、子どもの状況とのマッチングや教師のアプローチの違いに理由がありそうです。

今回は上手くいかなかった場合もありましたが、何のためにこの動きを取り入れるのかという意図や、教師の声がけの重要性に気付かれていることは、きっと、次へのステップにつながるとと思います。



実践ポイント

- 積極的に赤ペンで花まるをつけ、肯定的な声かけをする
- 達成感を味わえる活動を取り入れる
- よい変化を見付けて褒める
- 学び合いのお助けマン登場



実践事例 三



積極的に赤ペンで花まるをつけ、肯定的な声かけをする 小 中

1時間の授業の中でこまめに机間指導を行い、まる付けをしたり、よい意見の所に線を引いてあげる等、積極的に赤ペンを入れ、肯定的な声かけをする。

書いている文章を少し紹介し、どうしても思い付かない子どものヒントにもなるようにする。



「書けたね」「こんなことにも気付いたがや！」と認め励ますことで、子どもの意欲が上がった。また、よい意見に波線を引くと、自信がない子どもも前向きに発表することができた。

些細なことだけれど、やってよかったな。色々な方法で子どもとの関わりを増やしていくことが大事だな。



達成感を味わえる活動を取り入れる 中

無気力の原因の一つに、学習が苦手ということが考えられるので、学習が苦手な子どもでも達成感を味わえるようなエンカウンターや、謎解きのような活動を取り入れる。



進んで活動に取り組む子どもが多かった。褒められたときは嬉しそうにしている。

褒めたり認めたりするポイントを教師がどんどん見付けていきたい。



✓ よい変化を見付けて褒める

小 中

提出物が出せない子どもが提出できたら、提出できたことを褒める。



継続はできていないが、提出できる頻度が上がった。

「できた」の基準が子どもによって異なるが、新たな成功を見付け、認めることがどの子どもにも必要だな。



✓ 学び合いのお助けマン登場

小

テストや課題の直しをする際に、「お助けマン」を呼ぶ。課題が100点になった子どもから、他の子どもを助けに行く「お助けマン」になれる。ただし、誰の所にも行ってよいのではなく、必要があって「お助けマン、来てー」と拳手した子どもの所に行く。



子ども同士で助け合って解決し、説明がより上手になる子どももできた。

答えを直接言わないということを徹底するのが大事。教え方が上手な子どもの姿を紹介して全体で認めていきたい。



Good Point!



小さな成功・変化を見付けて価値付ける

「意欲が低い・無気力」という状態から、「できた・やってみたい」という気持ちを生み出すために、きっかけになりそうな活動を取り入れたり、子どもをよく見て小さなことでも成長を伝えたりするなど、寄り添う姿が素敵ですね。目の前の子どもがもっとよくなるために何ができるだろうと考え、それが頑張りや成長につながる喜びを感じられることは、教師冥利に尽きますね。



実践ポイント

- つまづきを知る
- 注意や指導を個別対応にする
- よいことで注目を浴びれば頑張れる



5



実践事例



つまづきを知る

小 中

いきなり注意するのではなく「何か質問ある?」「何か困っていることはある?」と聞く。



今までは反抗してくることが多かったが、このように聞くことで、分からなくて困っているのかそうでないのかが分かるし、こちらから寄り添うことで、その後注意しても素直に聞くことが多くなった。

注意や叱責をするにしても、頭ごなしに怒るのではなくて一度子どもに寄り添うことが大事だと気付いた。また、その後の関係が悪くならないよう、子どもが注意を受け入れられるように対応することも重要だと思った。



注意や指導を個別対応にする

小

全体の場で一方的に注意することをやめて、困っていることや反抗的な態度、問題行動の原因について個別対応で子どもと一緒に考える。



個別で話をするすることで、教室よりも素直に話を聞くことができていた。解決策を考え、反省するきっかけになった。

個別でゆっくり話すことはとても大切!




よいことで注目を浴びれば頑張れる



授業妨害をする子どもが活躍し、よい注目を浴びることができるような場面をつくる。



学級みんなに承認されることで問題行動の頻度が減っていった。たまに行動に出してしまったも、担任の言葉で落ち着くことができています。

授業妨害をする子どもと同じテンションでヒートアップしていたときは、お互いにとって苦しい時間だった…それでも根気強く付き合い、よい方向に変化してくれたことが何より嬉しい！


Good Point!

困った子は、困っている子

授業妨害をする子どもを「困っていることがあるから授業を妨害し、注意を引こうとしている」という視点でよく見て、その子どもの困り感を知り、寄り添うことから次の手を考え、子どもが前向きになれるように支援していることが素敵ですね。個別対応で寄り添いながらも、指導すべきことはきっちりと指導し、今後の解決策を子どもと一緒に考えることができれば、問題行動はよりよい行動に変わっていくことでしょう。





実践ポイント

- 一旦気持ちを受け止める，場所を変えて落ち着かせる
- 学級のみんで解決策を考える
- 事実確認と解決の基礎パターンで解決の道筋をもたせる



4



実践事例 三



一旦気持ちを受け止める，場所を変えて落ち着かせる

小

状況によって、「嫌だったんだね，後で聞くからね」と一旦気持ちを受けとめて授業を進めたり、「少し落ち着いてくる？」と声をかけて空き教室に連れて行ったりする。休み時間になったら必ず目を合わせて話を聞く。



落ち着いて授業を受けられるようにはなったが，ケンカ自体はあまり減っていない。

気持ちを落ち着かせる対応の他にも，ケンカの原因自体への対応も合わせて考えなければいけない。



学級のみんで解決策を考える

小

当事者が落ち着いて話ができる状態であれば，ケンカの内容を学級で共有し「みんなならこんなときどうする？」と問いかけ，全員で解決策を考える。



自分たちで考えた解決策は，互いに守ろうとするようになった。友達に注意をする際の声かけも優しくなった。

互いを思いやるような声かけが増え，よい雰囲気が増えて嬉しい！



✔ 事実確認と解決の基礎パターンで解決の道筋をもたせる 小

小学校の中学年は、発達段階としてもケンカは日常茶飯事。解決に向けた道筋として、①事実確認→②聞き取りの段階で「自分がしてしまったことでよくなったことはある？」と問う→③すぐに言えたら「よく言ってくれたね、辛かったね。ありがとう、どうする？」と共感しながら褒め、当事者に選択を委ねる(④謝る)という道筋を基本のサイクルとして一緒に考える。



子どもと一緒に解決を考え、解決のサイクルが子どもに定着すると、大抵の子どもは互いに謝罪して解決できるようになった。ある程度の事例はスムーズに解決できるようになったが、子どもによっては繰り返したり、後で新たな事実が発覚したりすることもあった。

発達段階や子どもの特性によってケンカの対応は千差万別なので、その時その時で変える必要はあるが、一定の「パターン」があることは、子どもに安心感を生むと思う。聞き取り段階の「事実確認」では、後で新たな問題が出てこないように、「これで全部？」と聞いて確認することが大事だと思った。



Good
Point!



感情を受け止め、行動は変えさせる

ケンカをした子どもの気持ちを受け止めたり、場合によっては落ち着くために時間や場所を構えたりしつつ解決策を探る手立てが工夫されていますね。「ケンカの対応は状況によって千差万別」というのは、まさにその通りだと思います。安易にその場しのぎの対応で終わらせるのではなく、子どもの気持ちを受け止めながら学級でもアプローチを続け、短期的、長期的両面での支援を積み重ねていくことが肝要ですね！



実践ポイント

- 小さなことから褒め、Iメッセージで気持ちを伝える
- よさを認めながら粘り強く関わる



実践事例 三



小さなことから褒め、Iメッセージで気持ちを伝える

小

小さなことでも褒める。ランドセルを片付けることができたときも褒めるなどする。そして、教師がその子どもにどうしてほしいのかIメッセージで伝える。



頑張って活動に取り組むことができた。

小さなことでも褒め、Iメッセージで伝えることを続けていきたい。



よさを認めながら粘り強く関わる

小

中

叱るだけでなく、子どもの様子をよく見て、できていることや人のために行動できていることなどを褒める。



得意分野で発表したり、自分が正解した問題を友達に教えたりするなど、学級の中で活躍する場面が出てきた。

最初は反抗する態度に心が折れそうだったけれど、根気強く関わると、次第に困っていることを相談してくるなどの関係を築けるようになってきた。今後も子どものよさを生かしてよい場面を取り上げられるように関わっていきたい。



Iメッセージで気持ちを伝えたが…

小

Iメッセージで伝えた。



「知らんし」と言われてしまった。

そもそも人間関係が築けていないとIメッセージも響かないことが分かった。まずは、子どもを肯定的に認めることが大切だな。

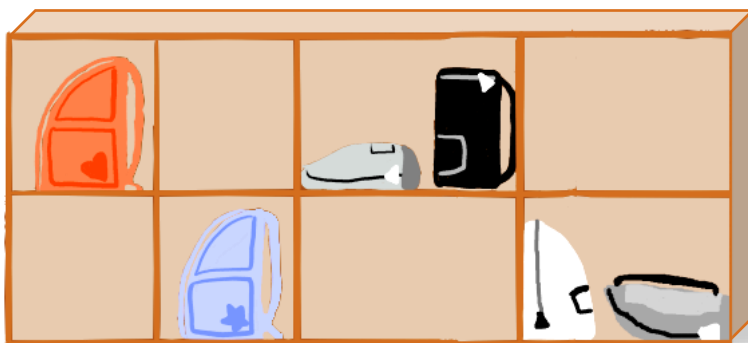


Good Point!



対決のIメッセージ

子どもに反抗的な態度を続けられると、マイナスな気持ちになることだと思います。心が折れそうになるのも当然でしょう。それでも、子どもを見捨てず、よい所を見付けて関わり続けることは、大きく誇れる教師力ですね。素敵です。子どもは口では色々言いながらも、自分のことを大事に思ってくれているかどうかは感じていることもあるでしょう。周りの教師と連携しながら、粘り強く関わるとよいですね。





実践ポイント

- 屁理屈も、まずは一旦聞く
- 指導は子どもの気持ちが落ち着いてから
- 頑張っている場面で褒め、成功体験を積ませる



実践事例 三



屁理屈も、まずは一旦聞く

小 中

注意に対して屁理屈を言うばかりで会話にならなかったため、屁理屈に対して叱るのではなく、まずは言い分を最後まで聞くことにする。その際、否定的な声かけはせず、子どもの気持ちを認めるようにする。



屁理屈はまだ言っているが、自分の気持ちを発言することが増え、粘り強く取り組む姿が見られるようになった。

はじめは会話にならず頭を抱えたけれど、子どもが変わっていく様子を見ると、とても嬉しかった。そして、一生懸命頑張ったことを素直に自分で表現できるようになったことが一番嬉しかった。



指導は子どもの気持ちが落ち着いてから

小

授業時間外に、ゆっくり時間をとって気持ちを聞き、本人の気持ちが落ち着いてから指導をする。



逆切れすることは0にはならないが、だんだんと不平や不満を言うことが少なくなり、自分が気に入らなくても全体のことを考えて我慢することができるようになってきた。

子どもをただ叱るのではなく、気持ちを聞いて、落ち着いて話をするのは大事だし、信頼関係も築くことができるんだな。



**頑張っている場面で褒め、成功体験を積ませる**

小

頑張っている場面を見つけてとことん褒め、まずは気の合う仲間と活動する中で成功体験を積ませるようにする。



苦手なことも友達にアイデアをもらって取り組み、そのことを子ども自身でも1学期で一番頑張ったこととして挙げていた。

これからも成功体験を増やしていきたいな。

**Good Point!****直そうとするな、分かろうとせよ!**

屁理屈であっても、子どもと向き合う時間をつくって話を聞き、子どもの心が落ち着いた状態になるのを待って指導していることがポイントですね。子どもの心が教師の話を受け入れられる状態になっていなければ、どんな話をしても伝わらないことがほとんどではないでしょうか。成功体験を増やして自信につなげることも、子どもの心が卑屈にならず、話を聞けることにつながっていくでしょう。





実践ポイント

- ほったらかしにせず必ず声をかける
- 友達と協力しながら問題解決をする場を増やす
- ゆっくり話を聞く
- 保護者と連携する



実践事例 三



ほったらかしにせず必ず声をかける

小

「どうしたの?」「体調悪い?」など声をかけてから、今、何をするのかを手短かに伝え、取り組めたときには「頑張ったね」とプラスの声がけをする。



最初のうちは指示したことが終わったらまた寝てしまうこともあったが、少しずつ、班のメンバーに聞いてできるようになってきた。

寝ている子どもには声をかけ続けることを長期的に取り組みながら、他の子どもとも協力しつつできることを増やしていきたい。



友達と協力しながら問題解決をする場を増やす

小

中

ペア対話や班活動など、友達と協力しながら問題解決をする場を増やす。



問題が分からないときには、寝たり、話を聞かなかったりすることがあったが、友だちと活動することで勉強が楽しいと思うようになった様子が見られた。

今後、班長の役目を任せて、班のみんなを引っ張っていけるようにもしたい。





ゆっくり話を聞く




しんどいことはないか、今の心の状態はどうかなど、ゆっくり話を聴く。



自分のことを聞いてもらえて嬉しい様子だった。

一人一人、ゆっくり話を聴くことが大事だと分かった。




保護者と連携する




小学校1年生は5時間授業を受けることだけでも体力が必要なので、寝ている子どもについては保護者に生活の様子を聞くなどして連携を図る。



子どもの様子を見て保護者に連絡したところ、生活リズムが不規則であることが分かった。本人も「授業は真面目に受けたい」と言っている旨を伝えて、早く寝る声かけをお願いした。すると、授業で頑張る姿がよく見られるようになった。

本人の頑張りを認めながら、これからも声をかけたい。



Good Point!



顔を上げた時がチャンス!

寝ている子どもをほったらかしにせず、声をかけたり、話を聞いたりするなど気にかける姿勢が大事ですね! 保護者とつながりをもって共に支援することも効果倍増です。保護者に協力を仰ぐ際、本人の気持ちを伝えることも保護者が前向きに協力してくれることにつながりそうですね。どの子どもも見捨てないという教師の姿勢は、寝ている子どものみならず、教師の姿を見ている周りの子どもたちにも伝わり、信頼関係を築くことにもつながることでしょう。



実践ポイント

- 一指示一行動
- できていることに目を向ける
- 近くで早めの声がけを



37



実践事例 三



一指示一行動

小 中

一つの行動に対して、一つの指示を出すように意識する。更に、することを板書で視覚化し、ペアでできているかどうかを確認させる。



みんなと同じペースで取りかかれるようになり、自分から行動できるようになった。全体的にも取りかかりが早くなり、何をすればよいのかが明確になったことで、授業中に別のことをすることが減った。

全員の活動が揃うことで、状況を把握できるようになった。日によっても、子どもの状態が違うので、そのときにあった声がけや支援を行いたい。




できていることに目を向ける

小 中

できていないことについて指摘するのではなく、「もう書くことができたんだね」と、できていることにすぐに反応する。または、周りのできている子どもを褒める。



自分で取りかかろうとすることが増え、「今日はもうこんなことができたよ」と報告してくれるようになった。遅れていても、褒められると嬉しそうに次の課題に取り組むことができた。

困っていることがないか聞くことで、その子どものつまずきに気付くことができた。褒められている子どもを見て周りの子どもも頑張ろうとする姿勢が見られた。



✓ 近くで早めの声かけを

小 中

周りの子どもからも目立つことなく伝えてあげることができるので、前の方の席にしたり、机間指導をしたりして、子どもの近くで早めに指示を出す。



することが分からなくても筆箱やノートを用意したり、声かけて書き始めたり、全体としても教師と同じスピードで進めている子どもが増えた。

指差して知らせたり、声かけをしたりするだけでも違うということが分かった。全体をぼんやり見るのではなく、もっと机間指導を積極的にして、できている子どもの即時評価を心がけていきたい。



🐼 全体を待たせることにも…

小 中

一指示一行動の徹底。「鉛筆を持つ」「ノートを開ける」といったことまで細かく指示を出す。



ほとんどの子どもは一緒に取りかかり、そろえることができたが、取りかかりが遅い子どもは、それでも遅かった。そのため、全体を待たせる結果となった。

全体も個人も大切だが、個人的には「遅れている人も気にかけていることを示しつつ、全体を進める」ことが大切ではないかと考えた。



Good Point!



すべきことを明確にして、子どもの成長に目を向ける

何をするべきかが明瞭だと、子どもたちはすぐに行動に移すことができますね。一つの行動に対して一つの指示だと、より分かりやすく、学習のスタートや一人一人のペースもそろいます。つついできていないことに気が取られてしまいがちですが、できていないことについて指摘するのではなく、机間指導でさりげなくできるようなるための手立てを打っていることが素晴らしいです。更に、できていることはすぐに褒めたり、OKサインを送ったりすることでやる気が持続しますね。



実践ポイント

- 書き方のルールを確認
- 書くことの精選
- GIGAタブレットの活用



実践事例 三



書き方のルールを確認

小

「一マス空ける」「一行空ける」などのルールを全体で確認し、分かりやすいように、画用紙で黒板に示す。また、板書とノートの文字数を一致させて、どこを書いているのかが分かるようにする。



ノートのどの場所に、何を書くのかが明確になり、子どもたち同士でもノートの確認ができるようになった。書き方をそろえることで、遅れていた子どもも少しずつ書くことができるようになってきた。

口頭で指示を出さなくても、黒板を見てノートに丁寧に書くことができるようになった。また、「一行空ける?」「どこに書くの?」という声も少なくなり、授業に集中して取り組むことができるようになった。



書くことの精選

小

板書を色分けして、必ず書くところ、書いた方がよいところ、書かなくてもよいところを分ける。



自分で考えて必要なところまで書いたり、少しずつ書くスピードが速くなったりすることで、書くことに対して抵抗がなくなってきたと感じている。

みんなと必ず一緒に歩幅を合わせて進まなければならないと思うと、子どもも教師もしんどく感じてしまう。勉強が苦痛だと感じないようにするためにも、個々に合わせた配慮が必要だと改めて感じた。書くことは大切だが、全てを書くことにこだわり過ぎず、目的を意識するようになっていきたい。



✓ GIGA タブレットの活用

中

板書を模したワークシートを配付したり，教師の板書計画をタブレットで写真にとってロイロノートで配付したりする。



「早く書かなきゃ」という焦りが減り，授業中の教師の言葉に耳を傾ける余裕が生まれた。

これまでは，書くことだけに必死になりすぎて表情が硬かったが，今では，余裕が生まれてにこやかな表情になった。個別支援が必要な子どもについても，自分でできるようになる手立てを考えることが大切だと感じた。

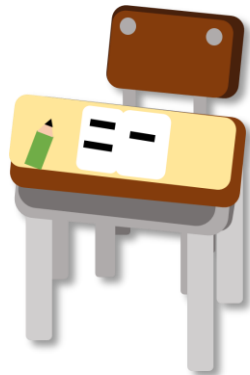


Good Point!



「書くこと」の何に困っているのかに気付き，支援方法を工夫する

書けるようになるための手立てがたくさんある実践でした。「一マス（一行）空けます」等，細かく指示を出しながら板書していくことで，子どもたちには，ルールとして書き方が定着しますね。更に，板書とノートが同じになるように書き方をそろえると，書き抜かりに自分で気付くことができるかもしれません。短期記憶が苦手，字を書くこと自体が苦手等，書くことに困り感が強い子どもには，タブレットで板書を撮影して記録したり，板書計画のコピーを渡したりすることも有効な手立てとなると思います。





実践ポイント

- やってみたいくなる仕かけづくり
- できることを一緒に考える
- できることからスモールステップで



実践事例 三



やってみたいくなる仕かけづくり

小 中

興味のあることと関連付けたり、活動の手順を短く区切ったりしてやる気をもたせる。例えば、国語の授業の最初には電子黒板を使って漢字クイズを行い、それをルーティーン化する。



授業の始めに楽しい活動があることで、学習のスイッチも入りやすくなった。活動をルーティーン化することで、見通しをもって活動に取り組むことができるようになった。

少しでも学習に取り組もうとしている姿を見ると嬉しくなる。また、該当する子どもだけでなく、学級全体により学習の雰囲気ができただけでなく、今後もなるべく安心して子どもたちが活動できるように工夫していきたい。



できることを一緒に考える

小 中

「やればできる」ではなく、何ならできかを一緒に考える。



はじめは何もやらなかった子どもが、自分のできることを探して行動するようになった。周りの子どもたちも「すごい!」「頑張れ!」などの温かい声かけをする場面が見られた。

子どもたちは、やりたくないわけではなく、どうしてよいか分からず困っているということに気付いた。これからも、何ができるかな?と一緒に考え解決し、いずれは、自分でできることを考えて行動できるようにすることを大切にしていきたい。



✓ できることからスモールステップで

小 中

「できん、やりたくない」という子どもに対して、具体的なゴールを示す。例えば、リコーダーなら、「四小節のみ、難しければ、のばす音だけ吹いてみよう」といったようにスモールステップで示す。そして、できたことをすかさず褒める。



やってみる前は、「どうせできない」とつぶやいていたが、チャレンジしてみると意外にもできて喜んでた。少しずつ、自分から取り組む姿が見られた。褒められると「次は？」と自ら進めるようになった。

子どもの中に達成感や満足感をもつことができたなら、それがやる気につながる。得意なことや苦手なことがあるので、「苦手」が「嫌い」にならないようにすることは大事だと思った。

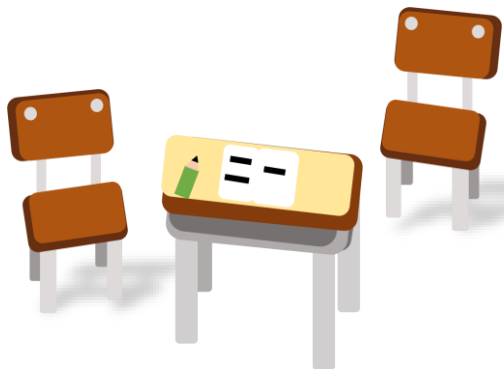


Good Point!



困り感に寄り添い、やってみたくなるような仕かけを作る

子どもたちにとって「やりたくない」ことを、「やってみようかな」「これならできるかな」と思わせる仕かけが必要ですね。その子どもの困り感に気付き、優しく、根気強く寄り添っている様子が思い浮かびます。教師がスモールステップで、一つのことができたらすかさず褒めること、結果ではなく過程を評価することで、達成感や満足感をもつことができ、更に次のステップへのやる気につながると思います。





実践ポイント

- 机には必要な物だけを置くことを徹底
- 遊びが始まるパターンをつかむ



実践事例 三



机には必要な物だけを置くことを徹底

小 中

机の上には、必要な物だけを置くということに、全員で取り組ませる。



触りたくなる物を置かないということを徹底すると、手足をバタバタさせることはあったが、手遊びは減った。

『あるあるヒント集』の四つのタイプを、目の前の子どもの実態に合わせてセレクトし、指導していきたいと思った。



遊びが始まるパターンをつかむ

小

子どもの手遊びが始まるパターンをつかむ。手遊びが始まってしまうであろうタイミングで意図的に指名し、授業の方へ意識を向かわせる。



周囲の子どもの様子を見て、「今、何をしているのか」を確認する様子が見られるようになった。

手遊びが始まってしまう、シンプルな理由「授業がつまらないから」に対しては授業改善が必要で、根気強く取り組む必要があると感じている。




持続が難しい…

小

今やるべきことを指示するようしたり、お手本となる子どもを積極的に褒めたりしているが…。



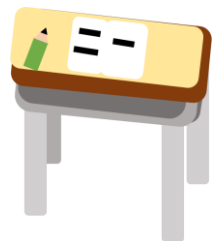
一時的に手遊びをしなくなるが、持続しない。

手遊びをしないような事前の声かけや、よい状態が長く続くよう工夫していきたい。


Good Point!

手遊びのタイプを見極め、その子どもに合った対応を

授業に意識を向けさせることで、手遊びをすることを未然に防いでいくということですね。手遊びを注意するよりも、授業を改善していこうとする前向きな姿勢が素晴らしいです。ただ、手遊びをすることで、集中できるタイプの子もいます。一時的には手遊びをしなくなっても、持続しないのはそのせいかもしれません。子どもの様子を見極め、他の友達に迷惑をかけていない程度ならば、“受け流す”ことも指導の選択肢の一つです。





実践ポイント

- 注意の仕方を工夫する



実践事例 三



注意の仕方を工夫する

小 中

「～しません」ではなく、「～しよう」「～できるといいな」という言い方で注意する。

個別指導は、指導したい子どもの傍らに行き、静かに注意する（全体の前で、大声で注意しないようにする）。



この方法にしてから素直に聞けることが多い。

教室に注意の音が響かないのは、周りの子どもにとっても落ち着くことができると感じた。



プラスの声かけを試みたが…

小

プラスの声かけにする。



その言葉がけも真似をする。

効果が薄い。



Good Point!



注意の仕方を変えて、周りの子どもへの刺激を減らす

同じ注意を伝えるにしても、言い方一つで印象が違いますね。大声で怒鳴る指導を続けると、注意したい子どもには届かないどころか、繊細な子どもがおびえてしまい安心して教室にいらなくなる可能性もあります。上手くいく教師はおそらく、子どもの様子をよく観察して、言葉がけや声色、関わりをその子どもに合わせて工夫したのでしょう！

その他、ふざけて注意を真似している場合には、シナリオを作ってロールプレイを体験させる方法もあります。教師の注意を真似することで、注意をされた人にどのような気持ちを与えてしまうかをみんなで話し合うこともよいかもしれません。



対人・生活場面の困りごと



実践事例

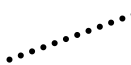
ピンチはチャンス



「目の付け所」

を

ほんの少し変えてみる





実践ポイント

- 話を聞き、気持ちに寄り添う
- 言葉の大切さを学級全体へ
- 不適切な言葉遣いは見過ごさず指導



7



実践事例 三



話を聞き、気持ちに寄り添う

小 中

本人の言い分をしっかりと聞き、その子どもの立場に立って話を聞く。



理由も聞かずに叱責していたころは、「自分ばかり！」と訴えていたが、話を聞いてもらい、自分の立場に立ってもらったことによって、興奮が収まり、落ち着いた状態で話をすることができた。話を聞いた後に、「けど、こうしたことはよくなかったよね」と聞くと、「そうだ」と素直に自分のいけないところを認めることができた。

叱責された子どもは、家庭でも普段からよく怒られており、自己肯定感が低いため、どんな場合でも「自分ばかり」となってしまう。子どもの行動の背景を知ることで対応策が見えてくることがよく分かった。問題行動にばかり目がいきがちだが、その背景に目を向けることで正しいアプローチができることに気付くことができた。



言葉の大切さを学級全体へ

小 中

言葉の大切さ、重みについて学級全体に話し、暴言やきつい言葉を投げかけたときに、「見過ごさない」ということを本人と周りに伝える。



少しずつ、言葉を選んで伝えるようになったり、優しい言葉がけができるようになったりした。

子ども同士の関わり合いを増やして、お互いに理解し合うことも必要だと感じた。



✓ 不適切な言葉遣いは見過ごさず指導

小 中

なぜ暴言をはくのか、何があったのか、何が気に入らなかったのかを聞く。不適切な言葉遣いに対しては指導し、嫌だったことを正しい言葉で伝えることが大切だと話をする。



今までは興奮状態だったが、落ち着いて話をするのができた。教師の話に納得し、うまく言えないときは教師に言いに来るようになった。

子どものニーズに合わせることが大切だと感じた。自分の思いを正しい方法や言葉で伝えることができない子どももいることが分かったので、教師が方法や言葉を教えることが大切だと思った。

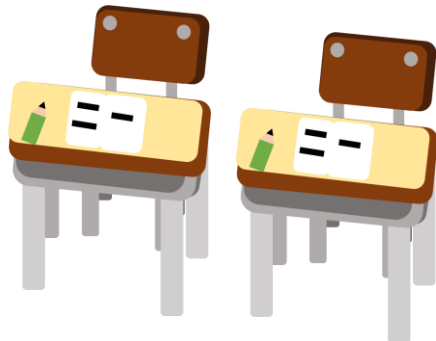


Good Point!



行動の背景に注目しながら話を聞き、言葉を大切に にした学級づくりを

「自分ばかり!」とならないようにするためには、行動の背景には何があるのかを知ることや、知ろうとすることが大切です。実践事例にもあるように、時間はかかるかもしれませんが、根気強く話を聞くことで、その子ども自身の家庭環境も見えてくることがあります。人権を無視するような言動は、絶対に見過ごさないということを伝えつつ、言葉の大切さを本人だけでなく、学級全体で話し合うことで優しい関わりがもてるようになることと思います。





実践ポイント

- 適切な言葉を教える
- ふわふわ言葉とふわふわ行動
- 個人面談で困り感に寄り添う



実践事例 三



適切な言葉を教える

小 中

すぐに注意するのではなく、子どもの思いを受け取って、適切な言葉遣いについて自分事として考えさせる。どんな言い方で伝えるべきなのかを、必要に応じて学級全体でも話し合う。



少しずつ言葉に意識を向けることができるようになり、相手の気持ちになって考えたことで、言葉遣いが変わった。

たった1回だけで上手くいくこともあれば、上手くいかないときもある。目の前にいる子どもを1年間という長い期間で少しずつよくしていこうと、教師が子どもに寄り添って共に歩いていくことが大切だと思う。



ふわふわ言葉とふわふわ行動

小

ふわふわ言葉とふわふわ行動について学習する。帰りの会で毎日「よいところ見つけ」をしたり、授業の中で「よいところ見つけ」のお手紙を友達に渡したりする学習を行う。



授業中に「頑張れ!」「大丈夫で!」「素敵です!」という声をかける子どもが増えた。

子ども同士で肯定的な声をかけられるようになったことがよかった。自分も肯定的な声かけをした子どもに対して認める声かけを増やしていきたい。



✓ 個人面談で困り感に寄り添う

小

子ども支援の教師も含めて個人面談を行う。本人が感じている困り感はないか、本当は友達とどういう関係になりたいと思っているかなどを言葉に出して説明させることで考えを整理し、次はどのように話しかければよいのかを一緒に考える。



個人面談の後は安心した様子で、友達に対しての言動に気をつけている場面も見られた。

個人面談などで、本人から聞かなければ分からない感情や思いを聞くことの大切さを感じた。今後も、面談を通して子どもの考えや思いを知り、尊重していきたい。

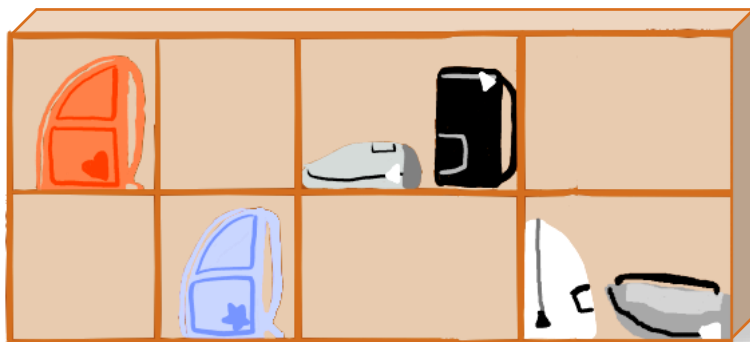


Good Point!



気持ちは受け止め、正しい言葉で関わり合う方法を伝える

どの実践事例も、その子どもの思いを受け止め、困り感に寄り添っているところが素晴らしいと思います。適切な言葉について考えさせたり、学級全体で話し合わせたりすることで、改善されていくこともあります。更に、教師だけでなく、周りの子どもたちからも認められる経験を積み重ねていくことで、その子ども自身が自己有用感をもてるようになり、肯定的な言葉で関わり合う温かい学級になると思います。





実践ポイント

- いつでも目につく工夫を
- 次につなげる工夫を
- 「忘れ物をしない技」を共有



実践事例 三



いつでも目につく工夫を

小

ランドセルの開閉は宿題を取り出したり入れたりする際に、毎日家で行うため、大きい紙に持ち物を書き、ランドセルを開いた際に見えるポケットに入れる。また、付箋に書いて連絡帳に貼る等、目につくような工夫をする。



翌日「先生、ちゃんと持ってきたで！」と子どもは嬉しそうだった。また、忘れ物をしそうときは「先生、紙ちょうだい!」「これ書いて入れていい？」と聞いてくるようになった。

小学1年生の忘れ物は保護者の協力も必要であるが、保護者は多忙なこともあり、子ども自身ができる取組を見つけたかった。(本当は連絡帳を見る習慣をつけたいが…) 今後も、必ず見ることが出来るランドセルのポケットに入れて、忘れ物を減らしていきたい。



次につなげる工夫を

小

中

忘れると困る理由を伝えたり、次に忘れないためにどうするかを考えさせたりする。



連絡帳に赤で大きく書いたり、メモ用紙に書いて机に貼ったりする姿が見られた。

それでも忘れることはあるが、忘れないために何か対策をすることはよいことだと思うので続けていく。





「忘れ物をしない技」を共有

小

忘れ物をしないために工夫していることを帰りの会で話題にし、子ども同士で共有させる。



筆箱の中に付箋を入れて、その付箋に明日の持ち物をメモしている子どもがいた。その子どもの技を聞いたAさんは翌日から付箋がほしいと要求してきた。その日から、忘れ物が少しずつ減っていった。

「忘れ物をしない技」を参考にしてほしいと思い、帰りの会に忘れ物をしないために工夫していることを聞くと、かなり盛り上がった。Aさんは、みんなから聞いた技の中で自分にできそうなものを選び、翌日付箋を求めてきたのかなあとと思う。



「毎日持ってくるものリスト」を作成したが…

小

忘れ物が多い子どもに、「毎日持ってくるものリスト」を作成する。



そのリストさえも無くしてしまい、効果がなかった。

実際に効果がほとんど無かったので、学校用の筆箱などを用意してもらうなど、保護者とも連携して取り組んでいきたい。



Good Point!



忘れ物をしなかったときの自分を振り返る

子どもたちで「忘れ物をしない技」を互いに出し合って、学級全体で取り組まれたことが素晴らしいと思います。その中から、自分の「とっておきの技」が見つかり忘れないようになると、その子ども自身も、技を教えた子どもも承認されたことになります。まさに成功の責任追及ですね。ランドセルを開くと、いつでも見えるポケットも有効でしょう。いつも持ってくる物は、〇点セットとして毎日点検するようしたり、特別に持ってくる物は、1週間前くらいから家庭にもお知らせしたりという、忘れないようにするための工夫が必要ですね。



実践ポイント

- ○○箱で片付ける場所を決める
- 段ボール箱を利用した道具入れ
- 整理整頓デーの設定



30



実践事例 三



○○箱で片付ける場所を決める

小

教材グッズを保護する型紙を活用して、○○箱と名付けた専用の箱を用意して物の住所を設定する。また、一緒に片付けをして、どうしたらよいかを本人と決める。

入りきらない荷物が置ける場所を作り、学級としてどのように使うのかを子どもたちに考えさせる。



整理整頓の意欲が高まり、苦手な子どもも、少しずつ片付けられるようになってきている。また学級として物を置ける場所を作ったことで、自分のロッカーに入れる物の量が減り、全員がきれいに置けるようになっている。

捨てる物を活用したり、個に応じたオリジナリティも出しながら意欲につなげることができ、うれしかった。

4月の早い段階で物が置ける場所を確保して、教室の使い方をみんなで決めることができれば、なおよかった。



段ボール箱を利用した道具入れ

小

中

教室の隅にダンボールを置き、バドミントンのラケット入れにし、余っている棚を体操服入れにする。空いているスペースを美術の作品置き場にする。



ラケットや美術の作品を教室のいたるところに置いてあったが、専用のスペースを作ることで、常にそのスペースに置くようになった。体操服入れを作ったことによって、かごの整理がしやすくなったという声があった。

専用のスペースを作ることはかなり有効。スペースを作った後、他の所に置く子どもはいなかったことから、子どもがばらばらに置くのは、置き場がなくて困っている証拠だと分かった。



✓ 整理整頓デーの設定

小

机の中の物（お道具箱）を机の上に出し、整理整頓してから帰るようにし、朝、荷物を出してお道具箱も机の中に入れるようにする。また、整理整頓しているかのチェックを毎週金曜日の放課後に設定し、それ以外の日に「片付けしなさい！」等の注意はしないようにする。



定期的に整理整頓の時間をとることで、きれいに入れておく意識を高めることができた。「片付けて」と言わなくても、自分で意識し、金曜日が近づいてくると、自分で整理をするようになった。「先生見て、きれいやろ」と見せに来てくれる子どももいた。

整理整頓は、気持ちの整理にもつながると聞いたことがあるので、これからも意識付けたいと思う。自分の机を見て「気持ちよい」と思えるように、整理整頓を心がけていけるようにしたい。



「毎日持ってくるものリスト」を作成したが…

小

物の住所を一緒に決め、一緒に片付ける。



三日ほどで、また元通りの散乱した状態に戻ってしまった。自分から整理しようとする意識はまだまだ低い。

日数が経つと元の場所に直せなくなり、継続することの難しさを感じた。1度だけでなく、毎週確認する等、ルーティン化することが大切だと感じた。また、できたときの声かけやシールなどの視覚的な支援があれば、やる気につながったかもしれない。



Good Point!



子どもと一緒に決めたルールで子どもと一緒に取り組む！

どこに何を置くのかを子どもたちと一緒に考えて決めることで、ルールとして整理整頓ができることにもつながりますね。子どもたちの柔軟な発想や斬新なアイデアとちょっとした工夫で、過ごしやすい環境がしてくれるだけでなく、子どもたちの創造性を育むことやSDGsにもつながります。

できるだけ年度当初に確認をして、継続させるための丁寧な指導は必要ですね。状況を見て、「ちょっと変える」改善を図りながら、取り組んでみましょう。



実践ポイント

- 子どもと一緒に掃除を！
- 役割分担でチームワークを生かす
- 「なぜ掃除をするのか」を確認する



実践事例 三



子どもと一緒に掃除を！

小 中

子どもと一緒に掃除をする。掃除をさぼりがちな子どもの頑張りをお褒め言葉に褒める。小さな成長も見逃さず褒める。指導（注意）したことについては、前と比べてよくなったことなどを評価する。



掃除への意欲が高まった。
声をかけると一緒に取り組んでくれるようになり、掃除をする時間が増えたように感じる。

一緒に掃除をすると、いろいろな子どもの頑張りが見られた。授業で、なかなか活躍できない子どもも評価でき、褒める機会が増えてよかった。
更によくするために、具体的な役割を子ども一人一人に与える。



役割分担でチームワークを生かす

小 中

役割分担を細かく設定し、また、掃除する場所でのチームワークを生かして、掃除が早く終われるように、協力できるシステムをつくる。



早く掃除を終わらせるために、自分の掃除場所に早く行くようになった。また、欠席の人がいれば、協力して「私〇〇さんのところやるよ～」と行動してくれる人が増えた。

よいところを見つけることに苦労していたが、掃除する姿を見て、認めたい、褒めたいと感じる部分がたくさんあった。仲間のために頑張っているところが見られて嬉しい気分になった。



小

「なぜ掃除をするのか」を確認する

1日だけ掃除をしない日を作ってみると、子どもから「教室が汚い」「いやだ」という声が上がった。そこで、「なぜ掃除をするのか」「掃除をするとどんな気持ちになるのか」という問いを立て、一緒に考える。

やる気をアップさせるために「ぴかぴか名人昇級テスト」（掃除の意義の理解、掃除道具の使い方や丁寧さ、仲間との協力などの観点で評価し、段階に応じて級を設定する）を実施する。



掃除の時間はもちろん、休み時間や図工の授業で手が空いたときにも掃除をしようとする子どもが増えた。

掃除の意義を理解し、積極的に掃除をするようになったのはうれしいことだが、昇級が目的にならないようにしたい。



Good Point!

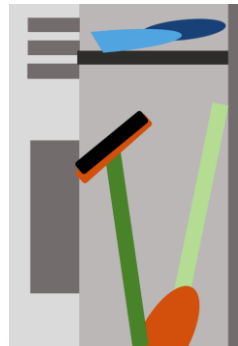


掃除の意義を考えさせた上で、掃除がしたくなるしかけを！

「なぜ掃除をするのか」を子どもたち自身が身をもって感じることで、自分事として考えることができていますね。特に、低学年のときに意識させることで、その後につながると思います。

低学年ほど、教師と一緒に掃除をしてくれるとうれしいので、一緒に取り組むことも効果がありますが、中学校になると、一緒に掃除をするだけでは難しい場合も。やはり、「なぜ掃除をするのか」が大事になってくるようです。

また、学習が苦手な子どもは、生活面（掃除）が褒めるチャンスです。小さなことから、褒めて認めていきましょう。





実践ポイント

- 陰口を言った子どもの言い分も聞く
- 気持ちに寄り添って



実践事例 三



陰口を言った子どもの言い分も聞く

小 中

陰口を言われた子どもの言い分だけでなく、陰口を言ったと思われる子どもにも話を聞く。



陰口を言った理由を説明してくれた。

今後、当事者だけでなく、話の中に名前が挙がった子どもにも事情を聞き、気持ちを受け止めたり情報を集めたりして子ども同士の関わりへの支援を行えるように取り組みたい。



気持ちに寄り添って

小 中

「そんなこと言ったらだめ」と否定の言葉から入るのではなく、子どもの気持ちに寄り添って、なぜそのような発言をしたのか、また、その発言をされると相手がどのような思いをするのかを一緒に考えさせる。



「ついそんな言葉が出てしまう」と自分を振り返っていた。もう言わないようにすると約束をしたが、まだつい出てしまうときがある。

子どもに対して一方的に怒るような指導をしてもあまり効果はなくて、子どもの思いに寄り添って考えることが大切だと改めて感じた。思ったことがすぐ口に出てしまったり、行動に移したりすることがまだあるので、自分でしっかり考えて行動できるように支援していきたい。



Good Point!



行動の背景に何があるのかに気付く

「陰口を言う」という、人を傷付ける行動に対しては、いけないことだと指導することは大切です。しかし、否定の言葉から入るのではなく、その行動の背景には何があるのかを考え、気持ちに寄り添いながら話を聞いているところが素晴らしいと思います。陰口を言われた側、言った側の気持ちを考えることや、みんなが安心して過ごすことができる学級について話し合うことも有効ですね。

実践ポイント

○ 活躍を認められる経験を



実践事例 三

✓ 活躍を認められる経験を

小

得意な教科で上手に説明したり、みんなが解決するためのポイントを言ったりしたときに、みんなの前で褒めて「〇〇くんはすごい」とみんなで話をする。

「Aくんの説明は〇〇がすごいね！お手本だ！」「Aくんはいいこと言うんだよな～！」と教師が授業の中で全体に価値付ける。



本人もうれしそうであったし、学級の他の子どもも友達を認め、温かい雰囲気になった。当人に対して、他の子どもの見方が温かくなってきた。また、休み時間に過ごせる特定の仲のよい友だちができた。

子どもをみんなで認めることで、普段の関わり方も温かくなったので、長期的に実践していきたい。子どもたちにとって教師の言葉一つ一つに影響力、重さがある。教師の言葉を少しでも変えることで、子どもの様子に変化が生まれるのではないかと感じ、更に実践を続けていきたいと思った。



Good Point!



活躍できる場を積極的に作り、みんなから認められる経験を

教師の言動が子どもたち一人一人の言動に大きく影響を与え、それが、学級全体の温かい雰囲気につながっている素晴らしい実践事例ですね。何かに対して不安やストレスを抱えている子どもも、活躍の場を認められ、その達成感や満足感が、やがて自信につながるのだと思います。この成功体験は保護者にも共有し、学校と家庭で連携して見守っていくようにすると、より効果が上がると思います。



実践ポイント

- プラスの声かけを
- 感情をはさまず淡々と対応



5



実践事例 三



プラスの声かけを

小 中

よい行動を見つけたら褒め、「〇〇してくれてありがとう」「お手伝いしてくれて助かる」などとプラスの声かけを行う。



電気をつけることや手紙を配ることなど、役割を与えるとイライラしていても「やります」と切り替えて動いてくれる。

授業中にも関わらず暴言を吐くので、授業が中断することもあるが、司会や発表等の役割を与えて授業に参加できるようにしていきたい。



感情をはさまず淡々と対応

小

子どもの言動に振り回されないように淡々と対応する。



言い続けた結果、子どもが理解してくれた。

時間がかかった上に、途中からこちらも感情的になってしまいそうになったが、粘り強く取り組めば効果があることがわかった。



Good Point!



プラスの支援で関わっていくこと

日常的により行動に対して「〇〇してくれてありがとう、助かるよ」といった承認の言葉かけや感謝の気持ちを伝える等、プラスの支援で関わりをもっていくことはとても大切なことですね。その積み重ねで、少しずつ自己有用感がもてるようになっていきます。

実践ポイント

- まずはクールダウンを
- 寄り添った後に、行動を振り返らせる



実践事例 三

✓ まずはクールダウンを

小 中

興奮している子どもは別室で（なるべく涼しい場所）クールダウンさせ、思いを聴く。それを否定せずにまず受け止める。



冷静に話ができるようになった。

落ち着かせることと受け止めることが、やっぱり大事だなと感じた。



✓ 寄り添った後に、行動を振り返らせる

小 中

「何があった？」「どうしたかったの？」と、その子どもの気持ちに寄り添い話を聞く。また、どうすればよかったのか自分の行動を振り返らせる。



暴力が少なくなり、多少のことなら気にせず、自分自身の中で気持ちをコントロールしている姿が見られるようになった。

子どもに寄り添って話を聞くことと、いけないことはいけなくて指導はしっかりすること、我慢をする方法や、別の伝え方を一緒に考えていくことが大切だと感じた。



Good Point!



冷静な対応と寄り添うことで、安心感をもたせる

興奮状態にあるので、まずはクールダウンできる場所を確保し、落ち着くのを待ってからその子どもの気持ちや困り感に寄り添いながら話を聞くという、冷静な対応が素晴らしいです。そして、イライラしたときに、暴力ではない他の方法を、一緒に話し合っ決めてくれることも大切ですね。きっと、その子どもなりの感情をコントロールする方法が見付かり、行動に変化が現れてくることと思います。

ニーズが高まる学校あるあるヒント集の反響

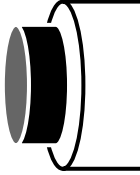
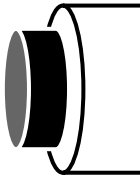
昨年1月に『ほんの少し変えるだけでうまくいく～学校あるあるヒント集～』を刊行し、高知市内の全ての先生方に一人1冊配付しました。その後どこから情報が入ったのか、高知市教育委員会が出した本がとても使い勝手がよいという噂？が広がり、県内の市町村教育委員会や学校から「ぜひこの冊子を分けて欲しい」という電話が次々にかかってきました。中には「できれば一人に1冊配りたいので30冊欲しい」という要望もありましたが、各教育委員会や学校には1冊ずつしかお渡しできない旨をお伝えすると本当にかっかりしておられました。

そして4月14日には「先生の困りごと解決へ冊子 高知市教委 子の行動と背景解説」という見出しで高知新聞でも紹介があり、更に「この本が欲しい」という電話が多くなりました。また、この記事を読まれたFM高知のスタッフからは、5月の毎週水曜日の朝の番組で、冊子の内容を紹介してほしいという依頼もありました。

こういったメディアからの発信を目にしたある高知市民の方からは、「孫が学校で落ち着きがなく、授業中に飛び出したり、友だちに暴言を言ったりして息子夫婦がとても困っている。ぜひこの本を息子夫婦に渡してやりたいので1冊分けてもらえないだろうか」という電話もありました。

高知市の先生方のために作成した冊子ですが、高知市だけではなく県内外の学校や保護者の方の手にもわたり、子どもたちの成長のために役立っていると思うと感無量です。

教育支援センターみらい 吉本 恭子



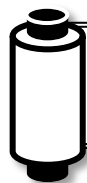
第 3 章



実践事例

個別・情操面の困りごと





困った子は困っている子



ほんの少し変えてみる

「子どもの捉え方」

を





実践ポイント

- 動きたくなったときにどうするかを一緒に考える
- 動く活動を取り入れる
- 他のことに意識を向ける



8



実践事例 三



動きたくなったときにどうするかを一緒に考える

小

机や椅子をたたいて音を出してしまう子どもに対して、動きたくなったときの行動パターンを一緒に考える。



両手の指を合わせて、くるくると回す動きが気に入ったようで、教えてからは音を鳴らす回数が減少し、くるくると指回しをして静かに過ごすことができていた。

授業中には動きを取り入れたり、代わりになる動きを教えたことは有効だったかなと感じた。



動く活動を取り入れる

小

ペア活動やグループ活動、立ち歩きでノートを見たり意見を聞いたりしていく活動などを取り入れて、常に動いて活動するようにする。立ち歩き的时候は、ただノートを見て回るのではなく、「一番いいなど思った意見を見つけておいで」と言ってから、見に行かせるようにする。



メリハリのある授業になり、子どもの集中力も上がってきている。また、話合いが増えたことで、自然と聞き方や伝え方がよくなった。授業が楽しいという声が増えた。

「じっとしてね」と注意することが増えていたが、活動を増やすことで、子どもの集中力が上がった。

また、会話が増えたことで自信をもって発表でき、フラフラ動かず集中できる子どもが増えた。2学期は更に質問や感想などを言えるような学級にしていきたい。



✓ 他のことに意識を向ける

小

まずはじっくり見て、様子を伺う。すぐに注意をするのではなく、「どうした?」「今何する時間?」と尋ねる。作業が分からないときには、丁寧に説明する。配付物がある場合には、お願いをして、してくれた場合には、褒める。



やることがはっきりしている場合には、取りかかることができている。配付物をお願いするときには、快く引き受けてくれている。

どうしても動いてしまうときもあるが、無理やり止めることで余計に動いてしまうときがあるので、他のことをお願いすることも有効だと気付いた。



🐼 目的やルールがはっきりしないと…

小

椅子ブランコが多く落ち着きがないので、立ち歩いて活動する時間を作りメリハリをつける。



余計に騒がしくなった。

他の方法を考えたい。



Good Point!



子どもの行動を否定するのではなく、対処方法を一緒に考える!

動いて活動することで気分転換ができ、次の活動に集中できます。動きたくなったときの対処方法を一緒に考え、自分で決めさせることが大事ですね。注意や指導ではなく、子どもの様子を観察して、切り替えることができる行動を考えてみましょう。

ただし、目的のない活動やルールのない活動だと好き放題になってしまう危険性があるので、要注意です。「何のために、この活動をするのか」「活動のルールは…」をしっかり考えてから実践してみましょう。



実践ポイント

- 困り感に寄り添う
- クールダウンの時間をとる
- 対処法を一緒に考える



実践事例 三



困り感に寄り添う

小 中

イライラしてテストを破ったり，教科書を落としたりすることを叱るのではなく，イライラしたからやってしまった気持ちに共感する。そして，困ったときには教師に声をかけるよう伝える。



まだ物に当たることはあるが，「先生分からーん」と言いに来るようになった。また，友達に優しくしたり，学級会で学級のことを考えた発言をしたりする姿が見られた。

困り感に寄り添う大切さを学んだ。



クールダウンの時間をとる

小 中

話をするときは，エアコンが効いた涼しい部屋で薄暗くして，落ち着かせてから話ができるようにする。



落ち着いて，話ができるようになった。

特に夏場は暑いのでイライラしがちだが，エアコンの効いた部屋でいると，次第に落ち着くことが分かった。最近では，本人の口からも「クールダウンがうまくできる（できない）」という内容の発言も見られ，少しずつメタ認知できるようになってきている。




対処法を一緒に考える


小

「100 数えよう」「落ち着いたら次の行動を聞かぬ」と言って、落ち着くまで待ち、次の行動を選択肢をあげて聞く。クールダウンの方法も一緒に考える。
(教室から出て散歩に行く、水を飲む、虫取り、本を読むなど)



物に当たらず落ち着けるようになった。授業に参加できるまでの時間は短くなった。

「クールダウンに行こう」と本人が思ってくれるまでに、まだかなり時間がかかるので、すぐにクールダウンできる方法や切り替えの時間が短くなる方法を探していきたい。



イライラの状態を理解するのが難しい子どもも…

小 中

イライラしたときの身体症状を聞く。



本人にも分からない。

怪我をさせる場面もあったので、2学期は他の方法を一緒に考えたい。


Good Point!

子ども一人一人に寄り添った対応、そして対処法を一緒に考える！

子ども一人一人の状態に合わせて冷静に判断し、指導ではなく、対処方法を工夫することができていますね。クールダウンできる環境については、子どもによって違ってくるので、クールダウンの方法や対処法を子どもと一緒に考えて決めていくことも大切です。子ども一人一人に寄り添った対応が、子どもたちの「困った」の改善につながります。



実践ポイント

- 6秒ルール
- 話す以外の方法でコミュニケーション
- 学級で決めた合言葉「10秒深呼吸」
- 切り替えができるのを待つ



実践事例 三



6秒ルール

小 中

怒りを感じたら、まず6秒待って怒りを静める。



切り替えが難しい点はまだ変わらない。しかし、以前は切り替えにかなり時間がかかっていたが、今では「先生6秒待って」と自分から言って切り替えられるようになってきた。

子どもが自分自身のことを理解して動けるようになってきているので、続けていきたい。



話す以外の方法でコミュニケーション

小 中

話すのが苦手で、指導をしたり注意をされると話すことも反応することもできなくなってしまう子どもがいて悩んでいた。そこで、「A?B?それ以外?」の選択肢を紙に書き、指差しをしながら、ゆっくりと時間をかけて気持ちを確認するようにする。



ゆっくりだが気持ちを伝えることができ、スッキリとした様子だった。

今までその子どもに指導をすると一時的に会話することができなくなっていたので、これからもこの取組をしながら、休み時間を一緒に過ごして関係づくりをしたい。



✓ 学級で決めた合言葉「10秒深呼吸」

小

喧嘩が多く、学級の子どもが「こんなクラス嫌だ。転校したい」と言ったことをきっかけに、学級会で『喧嘩を減らすために…』というテーマで話し合いをした。その際、「落ち着かないかん」という意見が出たため、「10秒深呼吸」を学級の約束事として決定し、実行する。



「10秒深呼吸」と言えば、しっかりと自分で言い、自分で落ち着こうとする姿が見られた。また、トラブルが生じた際、「10秒深呼吸」できたかどうかを振り返る観点になり、子どもの中で“合言葉”になった。

興奮状態にある小学校3年生にとって「10秒深呼吸」を自分からすることは難しいが、落ち着くための合言葉になったことはとても大きかったと思う。今後も継続していきたい。



✓ 切り替えができるのを待つ

小 中

子どもがすねていたら待つ。時間をおいて、切り替えることができたら、それから話をする。



まだまだすねることはあるが、授業の邪魔はしなくなった。

自分で切り替えることができるようになったら褒めていきたい。



Good Point!



気持ちを切り替えるための「合言葉」!

「6秒ルール」など、怒りに反射しない方法を伝えたり、学級全体で決めた「10秒深呼吸」を合言葉にみんなで意識したりするなど、切り替えるための方法を子どもと一緒に考えて決めていくことが大事ですね。

いろいろなタイプの子どもがいるので、子ども一人一人のペースに合わせて、コミュニケーションをとる方法をいろいろと試してみて「蓄積データ」として改善に役立terるといいですね。



実践ポイント

- 大声を出していないときに承認の声がけ
- 「見ているよ」の合図
- 自分で気付かせることも大事



実践事例 三



大声を出していないときに承認の声がけ

小

大声が続いているときには「どうしたの？」と声をかけるようにして、大声を上げなくなったときには、そっと近づいて承認の声がけをする。



かまってもらえてうれしい様子で、大声ではなく「〇〇先生」などの固有名詞を使って呼ぶようになった。

授業中だけでなく、休み時間にも話をするなど関係を作っていた。



「見ているよ」の合図

小

他の子どもに対応しているときや、全体での説明時にはそばまで行けないことを伝えると、大きな声で叫んだり、教室を出してしまうといった様子が見られた。そのため、活動時間になったときには、まずその子どもとやり方を確認したのち、「またあなたのところに回ってくるからね」というメッセージを伝え、あなたのことを見ているということが伝わるように意識をする。

また、授業外の場面でも頑張っていることや、できていることを褒めるなど、日ごろの様子を認める声かけを意識的に行う。



改善とまでは、いっていないが、大声を出したりする機会は少し減ったように感じる。

大声を出さないように指導することよりも、子どもが大声を出す理由を考えることが行動の解決の近道になるのだと感じた。




自分で気付かせることも大事


小 中

教師側がびっくりしたように「どうした？」と問いかけをする。



「さっきの声のボリュームがまずかったかな?」「うるさかったかな」と焦った様子で、自分の行動や発言がまずかったかなと気付いているようだ。

その子どものことは部活動でも指導している。「部活を学校生活に生かす」のではなく、「学校生活が部活に生きる」ようになってほしいと思っているので、学校生活の中で指導をしていきたい。



注目欲求か回避欲求かを見極めないで…

小 中

何かあると、「先生!見て!」「先生!先生!」と言う子どもがいる。そこで、困ったときの対処法として、「困ったときは静かに手をあげたらいよいよ」と声をかけるようにする。



何人かは、静かに手を挙げることを覚えた子どももいたが、「先生!」と呼ぶ子どもはまだいる。

実際、困っているというよりも注目してほしいという気持ちが強い子がいることに気付いた。困ったときは、静かに手を挙げることやほかのヘルプサインについて指導していかなければならないと感じた。注目してほしい子どもについては、別のアプローチが必要になると感じたので、2学期以降実践していきたい。


Good Point!

子どもの行動の意味や理由を見極めることから!

よい行動を認めることで、よい行動が増えますね。自分に気付いてほしいと思っている子どもには、「あなたを見ていますよ」のサインやメッセージを伝えると安心して、落ち着くことができることもありそうですね。子どもの状況を丁寧に見取り、なぜそのような行動をしているのかを分析して対応することも大事ですね。



実践ポイント

- 長所も度を超えると短所になる
- 活躍できる役割を与え、「見てもらえる」場を



実践事例 三



長所も度を超えると短所になる

小 中

自分は楽しくても、周りの友達と同じ気持ちとは限らないことを伝える。また、周りの友達が楽しい気持ちになるような言動もあるため、よいところとして伝えるとともに、限度についても伝える。また、冷静になれるように、度を越す手前で目で合図を出すという約束をし、実践してみる。



目の合図で落ち着くことができる回数が増えた。お楽しみ会などのときには、周りの友達を盛り上げたりして大活躍をした。また、限度を守ってくれ始めたこの子どもに対する周りの子どもたちの反応も肯定的になった。

まだ完全ではないので、これからも続けていきたい。



活躍できる役割を与え、「見てもらえる」場を①

小 中

「悪目立ち」をしなくても、本人が「友達から見てもらえている」と思えるように、活躍できる場を与える。



与えられた役割を適切にこなせ、友達から認められた際に、嬉しそうな表情を見せた。

本人が「悪目立ち」をしなくてもよいと考え、行動が変わってきている。「一人一人の長所を伸ばす」という学級経営の方向性ともつなげ、本人が輝ける場をつくっていきたい。



**活躍できる役割を与え、「見てもらえる」場を②**

中

調子に乗りすぎてしまう子どもに対して、代表委員や体育祭実行委員など責任のある役割を与える。



学級全体のことを考えられるようになった。

人の嫌がることで注目を集めていた子どもが、役割を与えることで学級のために行動し、ポジティブな行動や発言ができるようになった。

**ただ伝えるだけだと…**

小

中

長所も度を超えると短所になることを伝える。



そのときはしなくなったが、すぐにまた始めた。

何回も伝えたにも関わらずなかなかやまらなかった。振り返ってみると、その子どもの長所を生かす場面を意図的に作り出すことが少なかった。今後はその子どもに活躍の場（＝発散の場）を与えることを意識したい。

**Good Point!****長所を生かして活躍できる場を増やす**

度を超えると長所にはならないことを理解させるだけでなく、その子どもの長所を認め、長所を更に生かすことができるような活躍の場をつくることで、「よい行動」が強化されていますね。

学級の子どもたち全員が、それぞれ、自分の得意分野で「認められる」経験をし、それらが積み重なることによる相乗効果も期待できます。



実践ポイント

- Iメッセージで伝える
- 手本でイメージをもたせて、解決の見通しをもつ
- 説明は短く、指示は細かく分けて



5



実践事例 三



Iメッセージで伝える

小

説明をしている途中で自分の言いたいことを言う子どもには、「あとで質問タイムをとるから、そのときに質問してね」と言いたいことを言える時間を後でとる。また、「目を見てしっかり聞いてくれゆうAさん、すごいね。うれしい」とできている子どもを褒める。指示を言った後には、「最後まで話を聞いてくれてありがとう」と、前向きな声がけをする。



できている子どもを褒めることで、周りにいた別の子どもも、よい話の聞き方をすることができた。前よりも、最後まで話を聞ける子どもが増えてきた。

もっと褒めて、子どもたちの意欲を高めたい。褒める以外で、待つことができるようになってうれしいな。



手本でイメージをもたせて、解決の見通しをもつ

小

中

指示を黒板に簡条書きで示す。イメージをもたせるために手本を示す。



イメージをもたせると、これからやることが予測できて、取り組みやすいようだった。指示も黒板に示していると確認しやすい。

時間は限られているので、説明を簡潔に分かりやすく、活動に対してイメージをもたせることが大事だと思い、日々、取り組んでいる。



✓ 説明は短く、指示は細かく分けて

小

具体物を子どもに提示すると、気になって毎回席を立てて見にくくがあるので、指示を細かく分けて「座ります」「今は先生の話を受けます」と伝え、それが達成できたときには評価をする。



少しずつではあるが活動に移るまでに声がけをすることが少なくなり、活動の時間を十分に確保することができた。また、習慣付けたことで自分で気を付けることができつつある。

一回で言おうとして、指示語を使い過ぎたことが原因であると分かった。具体的に例を挙げて分かりやすく説明できるようにしたい。



Good Point!



Iメッセージで「よい行動」を認め、指示や説明は簡潔に!

「ありがとう」「うれしい」など、Iメッセージで伝えることで、相手の行動を否定するのではなく、教師の感情を柔らかく相手に伝えることができますね。「よい行動」を褒めて認めることで、次の「よい行動」につながります。

また、説明が長いと大人でも待つのは大変。説明は短く、指示は細かく分けて、簡潔に分かりやすいようにして、待つ時間を少なくし、活動を多く取り入れましょう。





実践ポイント

- 自分の思いを伝える（Iメッセージ）
- 話合いのルールを決める
- 事実関係の把握と共有



実践事例 三



自分の思いを伝える（Iメッセージ）

小

授業中、一生懸命挙手をしている子どもがいるが、他の子どもにも発表をしてもらうため、別の子どもを当てると、それ以来、挙手をしなくなった。そこで、保護者に事実や教師の思いを伝え相談する。本人にも、「みんなに活躍してもらいたいから、当たらないときのほうが多いかもしれない。でも、あなたの意見も聞かせてほしい」という私の気持ちを伝える。



次の日から、当てられなくても文句を言わず、それでも発表しようという意思から、続けて挙手をしてきている。もちろんその子どもにも順番に発表をしてもらっている。

手が挙がらなくなったときはどうしようかと思ったが、自分の気持ちを伝えることができてよかった。



話合いのルールを決める

小

子どもの話合いのルールを再確認し、同じくらいの量を話せる環境を整える。
①一方の子どもが話すときは他の子どもは話さない。②話をすり合わせて分かった事実を子ども同士で確かだと確認した後に、違うことは言わない（話に出さない）。③自分自身のよくなかったところ、相手にしてほしいところを子ども自身が考えて伝える。



落ち着いて話をするができるようになった。相手の話を最後まで聞くことができるようになった。

うまくいくときもあるが、子ども同士の話が食い違い、最後までどうしても合わないこともある。そのような場合のよい対処法を今後身に付けていきたい。



✓ 事実関係の把握と共有

小 中

本人の思い込みが強い部分があったので、まず、事実関係をしっかり把握することを意識した。メタ認知の弱さもみられたため、話を重ねて事実関係を共有した。また、本人が日々どのように感じているかも聞き取りながら、保護者にも連絡し、保護者の不安を払拭することにも力を入れた。



「うーん、まあ分かったかなー」という曖昧な反応が変化することはなかった。しかし、本人や保護者の訴えは減ってきている。

高学年になり、学級みんなと同じように仲良くすることは難しくなってくると考えられる。しかし、捉え方を変えれば自分と波長が合わない人との付き合い方を学ぶことができる貴重な体験であると思う。



Good Point!



まずは、子どもに寄り添い、子どもの思いや考えを聴くことから！

子どもに寄り添って、本人の思いや考えなどを聴くと同時に、場合によっては事実関係について調査を行うなど、事実確認が必要ですね。本人はもちろん保護者にも情報提供し、教師の思いも伝える（Iメッセージ）ことも大切ですね。

子どもたちとの関り方については、ルールを決めておくことも重要になってきます。教師の一方的なルールにならないように、お互いを思いやるためのルールとして子どもたちと考えることも大事ですね。





実践ポイント

- その子どもに合わせたコミュニケーションの方法
- ソーシャルスキルトレーニング (SST)
- できることで関わりをもたせる
- まずは教師が「つなぎ役」を



実践事例 三



その子どもに合わせたコミュニケーションの方法

小

発声やジェスチャーもしないが、日々の日誌やノートにはたくさんの記述や、自分の思いを記入することができる子どもの場合、授業などの会話は筆談をすすめる。

また、周りの子どもたちも関わるができるように、教師自身がその子どもとのコミュニケーションのとり方のモデル（うなずきか首振りで答えられるような聞き方、筆談を通した会話）となるようにする。



その子どもの1学期の振り返りには、周りとの関わりが増えて嬉しかったことが記述されていた。まだ会話はしないものの、班での取組なども孤立することなく参加できている様子が見られた。

家族の願い、本人の意思としては発声をして会話することが目標なので、これから少しずつステップアップしていきたい。



ソーシャルスキルトレーニング (SST)

小

SSTを行う。隣の席の子どもだけでなく、立ち歩いて二人組をつくって活動させる。



少し心を開いて話せるようになった。

休み時間に学級の子と遊べるようになってよかった。これからも色々なアプローチをしていく。



✓ できることで関わりをもたせる

小 中

その子どもをあえて班長に任命するなど、人と関わる仕事をお願いする。



最初は上手くいかなかったが、次第に周りでサポートする体制が取れるようになり、コミュニケーションをとることができていた。

コミュニケーションを取りながら物事を解決できるようになり、成長を感じた。



✓ まずは教師が「つなぎ役」を

小 中

その子どもに話しかけるだけでなく、その話題を隣の席の子どもや班内の子どもにつないだり、関わることに慣れるために班での関わりを増やしたりする。



少しずつだが、その子ども自身から関わろうとする姿が見られた。

継続していくことが大切だと感じた。



Good Point!



その子どもに合わせたコミュニケーションの方法を工夫しよう！

どのような関わり方がよいのかは、子どもによっても違ってくるので、その子どもに合った関わり方を工夫していくことが大切です。やってみて、うまくいかなければ、他の方法を試してみることで、うまくいく方法がきっと見つかるはず。いろいろな関わり方をするうちに、本人も周りの子どもたちも、少しずつ関わり方を学習してよりよい関係づくりが期待できます。

並行してソーシャルスキルトレーニングをすることも効果的です。



実践ポイント

- 「見ているよ」の合図
- 「自分勝手」と否定的に捉えないで、認める
- 本人のペースを大事に
- ルールを守るためのグループワークトレーニング



実践事例 三



「見ているよ」の合図

小 中

今日も頑張ろうと、休み時間にグータッチをする。



教師が見てくれていると感じ、みんなと同じスピードで頑張れるようになった。

自分もアイコンタクトをして子どもと関われるので、よい時間が取れている。



「自分勝手」と否定的に捉えないで、認める

小 中

自分勝手と思わず、まずは思いを受け止めるようにする。そして、今すべきことを伝え、できることを選ばせるようにする。



はじめは自分勝手な行動をしていたが、自分ができると選べたことで、自分勝手な行動が減り、周りに合わせた行動ができるようになってきた。

粘り強く、叱らず確認をし続けることで、子どもの行動も変わるんだと感じた。また、できることを選ばせて、できたことを評価することで子どもの意欲につながったと思う。これからも頑張りを認めていきたい。



✓ 本人のペースを大事に

小

本人のペースも尊重し、授業中に文房具で遊んでいたら、「それ（遊び）が終わったらノートに書くよ」と個別に声をかける。



自分のやっていることが終わったら、切り替えて、集中して授業に参加するようになった。

上から目線で指導するだけでは子どもは成長しない。



✓ ルールを守るためのグループワークトレーニング

小

中

ルールを守るために、『あったかプログラム』の「無人島にもものを持っていくならどれがいい？」をする。ルールを守って話合いをするように伝える。



ルールを守って話合いをすることの大切さを感じたようで、グループワークをするときに人の話をしっかり聞くようになった。

ルールを守ることの大切さを子どもたちは感じたと思う。『あったかプログラム』をどんどん活用していきたい。



Good Point!



子どもの行動を否定的に捉えず、「よい行動」を認めて強化！

注意を引きたくて自分勝手な行動をとっている場合は、「見ているよ」の合図が効果的ですね。また、「自分勝手」と否定的に捉えないというように、教師の考え方をちょっと変えるだけで、それが子どもの変容につながるということを実践で感じることができる教師もたくさんいるようです。本人のペースを大切にしながら、「認める」そして、「適切な行動ができたなら褒める」の繰り返しで、よい行動が増えていくと思います。



実践ポイント

- ブロックンレコード対応
- 「怒る」ではなく「寄り添う」
- 目に見えて残る指示



10



実践事例 三



ブロックンレコード対応

小

何をするのか板書するようにする。ブロックンレコード対応をする。



繰り返すうちに少しずつ座れる時間が増えてきた。

何回も注意をしていると感情を挟んで指導してしまうこともあるので、淡々と注意するようにしたい。また、そうすることで教師側がイライラすることもなく、全体も見ながら支援ができることが分かった。



「怒る」ではなく「寄り添う」

小

中

これまでの怒る対応ではなく、「どうしたの？」と声をかけたり、事前に決めていたサインを提示したりする。授業に参加していなかったときには、「なにか困っていることはない？」と聞いてみる。



その場で「分かりません」など意思表示をしてくれたり、後から「あのとき〇〇やったかも」と言ってくれたりする子どもが増えた。

こちらが怒ると反発心から感情的になるが、対応をほんの少し変えることで、罰が悪そうな顔をしたり、すぐに冷静になって席に戻ったりすることができていた。

子どもは、教師に「怒られる」より「寄り添ってもらう」方が、気持ちの切り替えができていた。他の事例でも、いきなり怒ることはしないように余裕をもって対応をしていきたい。



✓ 目に見えて残る指示

小 中

単元ごとに授業の流れを固定化し、カードを提示して一時間の授業の流れ、今どこをやっているのかが分かるように黒板に視覚化する。また、指示はメモを渡して何をしたらよいのかを「見える化」する。



今何をしたらよいのかが明確になり、やることが分からなくて席を立つという子どもが減った。

立ち歩く回数も少し減り、ノートを以前より書くようになった。

教材研究をしっかりと行い、授業の流れを事前に確認して視覚化するなど、授業力を高めることが、学習規律や学級経営につながっていくことが分かった。



👤 立ち歩きの理由によって対応に違いが…

小 中

座れているときに褒める。具体的な予定を見せ、見通しをもたせる。タイミングをみて、子どもの近くで声をかける。



一時的には座れるが、長続きしない。

日によって、子どもの様子が違うため、より一層実態把握をしていきたい。



Good Point!



子どもの困り感に寄り添った対応を！

今、何をすればよいか分からなくて「立ち歩く」場合は、授業の流れを固定化したり、カードなどで黒板に視覚化したりする工夫が効果的です。また、感情的に注意や指導をするのではなく、同じトーンで淡々と繰り返し伝える「ブロークンレコード対応」もよい効果が得られるようです。

「怒る」ではなく「寄り添う」ことで子どもの困り感に気付くことが解決の第一歩ですね。



実践ポイント

- 活躍できる場を！
- 対処できる方法を一緒に考える
- Iメッセージで伝える



実践事例 三



活躍できる場を！①

小 中

その子どもが活躍できる場（日直など）や、発表の場を多くして、「すごいね」と言ってもらえる場を多くする。



「今日褒められて嬉しかった」「今日の授業楽しかった」と言うようになり、教室から飛び出さなくなった。一切教室から出ていかなくなり、今では自席にいることが通常となった。

今後は、他の子どもの話を集中して聞くことができるようにしたい。



活躍できる場を！②

小

教室にクールダウンできる場所やクッションを置いたり、職員室にいる教師にプリントを渡してくるなど、あえて教室を出るお手伝いをさせたりする。



自分だけが教師の特別な役割を任された気持ちになり、取りに行ったあとは、教室にいる時間が長くなった。

お手伝いをさせ、自己肯定感を高めることができたのはよかった。たくさんの教師に手伝ってもらったので、多くの先生に現状を知ってもらえたこともよかった。

課題は、真面目に学習をしている子どもが、教室を抜けた子どものことが気になったり、自分も行きたくなくなったりしたことだと思う。



✓ 対処できる方法を一緒に考える

小

落ち着きたいときに行く場所を相談して決め、一言「〇〇に行ってきます」と言ってから行くように約束をする。このことは保護者にも伝えて了承をもらい、できたときには学校でも家庭でも褒めるようにする。



最初は報告なく飛び出していくこともあったが、管理職等にちゃんと言ってきたか確認をしてもらうことで、報告を出ていくようになった。保護者の協力もあり、そのほかの出来事も経て1学期の最後には教室を飛び出すことがほとんどなくなった。

他の教師の協力があって実現したことだと思う。自分でも落ち着いてそのような話合いがもてるようになりたい。



✓ Iメッセージで伝える

小

中

「教室に戻りましょう!」と伝えるのではなく、「先生は〇〇さんと一緒に授業をしたい」とIメッセージで伝える。



抵抗する感じは普段よりも減り、教室に戻るか迷ったり、実際に戻ったりすることがあった。

自分の気持ちを丁寧に伝える指導は教師側もストレスを感じない。



Good Point!



例外を探して、例外を増やす

教室を飛び出す原因を分析することが大事ですね。原因によって対処方法も変わるようです。

「認めてほしい」ことによる飛び出しの場合は、活躍できる場を設定し、できている場面を見つけて褒めて認めることで、次も頑張ろうという気持ちにつながりますね。Iメッセージで伝えることも有効のようです。

パニックになり感情が抑えられない場合は、クールダウンできる場所や対処できる方法を子どもと一緒に考えて決めておくと効果的ですね。



実践ポイント

- 教師が太鼓判を押す
- お互いに「よいとこさがし」
- 成長した自分を見える化



20



実践事例 三



教師が太鼓判を押す

小 中

「間違ったらどうしよう」「できない」など言う子どもには、「大丈夫だよ」「間違いはないよ」というような声がけをする。また、学級の子どもに1日1回以上「ありがとう」と言えるように心がけていることを、子どもたちに話して実行する。



他の子どもからも「失敗は成功のもとやで」「大丈夫」「頑張れ」など声をかける姿がみられた。すると「じゃあやってみようかな」と頑張ることができた。また、担任が「ありがとう」を言うたびに、子どもが「あ！言った!!」と反応するようになり、次第に自分たちでも「ありがとう」を言うことが増えてきた。

肯定的な声がけをすることで、子ども同士でもあたたかい声がけをしてくれるようになるんだなと思った。教師の声がけは子どもにとって大きな影響を与えるから、担任がモデルになることが大切だと思った。



お互いに「よいとこさがし」

小 中

お互いのよいところをカードに書いて、伝え合う活動を取り入れる。そのカードを自分で画用紙に貼り、残せるようにする。



友達のよいところを書くときは楽しそうに行い、もらったときは嬉しそうに受け取っていた。普段、注意をよく受けるような子どもが、たくさんの友達からよいところカードをもらって、喜んでいった。

友達のよいところを日頃から意識するようになるし、カードをもらった子どもは素直に嬉しそうだったので、これからも続けたい。自己肯定感が低かった子どもが、たった1時間の取組で、人のよいところまで探そうと気持ちが変わるくらい変化が見られたことに驚いた。



✓ 成長した自分を見える化

小 中

「できるようになったこと」「頑張ったこと」を書き自分の成長を振り返る時間をつくる。

計算プリントのスコアタイムの表で、自分ができるようになったことを実感させる。

できていることや頑張っている瞬間を写真に収め、教室に掲示する。



係の仕事や運動会での頑張りなど、自分の成功体験や頑張ったことを振り返って書くことができていた。「ホントや！こんなにできるようになっちゃったがや！」と成長を実感でき、笑顔になっていた。

振り返ることで自分の頑張りや強みに気付くことができるんだと思った。学期末だけでなく時々実施していきたい！

学級全員のよいところを見取ることが大変だったが、子どもはもちろんのこと、保護者の方も喜んでくださった。

頑張りカードを作り、自分が頑張ったときにシールを貼るようにすると頑張りがいつでも自分で確認できるということを研修で学んだので実践してみたい。



Good Point!



個人内成長に気付く

まずは、教師がモデルを示すということを実践できていますね。温かい声かけのお手本を常日頃、耳にすることで、居心地がよい雰囲気を自然に感じ取ることができると思います。また、お互いによいところを探して、伝え合う活動も素晴らしいですね。特に、低学年からその環境で過ごすことで、集団が変わっても温かい雰囲気の関係が続くと思います。

メタ認知も大事なことです。自分の成長を振り返る時間を定期的にとることは続けていきたいですね。



実践ポイント

- 「褒め言葉のシャワー」で子ども同士をつなぐ
- 認めて伸ばす
- 短時間で、全力で関わる
- 教師も一緒に遊ぶ



実践事例 三



「褒め言葉のシャワー」で子ども同士をつなぐ

小

帰りの会で「褒め言葉のシャワー」を行うようにする。1日一人ずつ「褒め言葉のシャワー」をもらう人を決める（出席番号など）。他の子どもはその子どものよかったところ、頑張っていたところを発表していく。最後に、褒め言葉もらった子どもは、学級のみennaに対して一言。



褒められた子どもも褒め言葉を贈った子どもも皆満足げで、自分の番はまだかとワクワクしながら楽しみに待っている。

子どもたちが学級の中で居場所を感じられれば、少しずつ自己肯定感も高まり、大人との関わりだけでなく、子ども同士での関わりでも満足できるようになればと思う。いい感じ！



認めて伸ばす

小 中

今できていることを認め、どのように行動すればもっとよくなるのかを一緒に考える。



褒められたところは継続し、自分をよりよくするために考えて、教師へ甘えてくることがなくなった。

叱ることではなく、認めることが大事だと改めて感じる事ができた。今できていることに教師が目を向けてあげることで、子どもが向上心を持って取り組むことができると思う。これからも、子どもに寄り添った声かけを心がける。



✓ 短時間で、全力で関わる

小

関わりは1分以内で行う。ずっと相手をしていると、他の子どもとコミュニケーションを図ることができなくなるため、短時間で。ただし、見かけたら必ず関わる。



短い時間で思いっきり甘えてきて、その後はバイバイと去っていく。

学年単位で関わってあげることで、少しずつ愛着形成ができればいいなあと感じている。



✓ 教師も一緒に遊ぶ

小

休み時間に教師も一緒にみんなで遊ぶようにする。



教師と遊ぶことにより縦系がつながり、友達と遊ぶことにより横系もつながった。

まだ休み時間にみんなと遊ばず教師のところに來ることが多いため、横系を更につないでいきたい。



Good Point!



「教師と子どものつながり」から「子どもと子どもとのつながり」へ！

できていることに目を向け、認める。それが、一部の子どもだけにならないように、全員への「褒め言葉のシャワー」として取り組むことで、友達のよいところを発見するということにもつながりますね。

また、個別対応としては、短時間でたっぷり関わって受けとめることで、子どもは満足して自分の活動にうつることができるので、「長い時間ずっと」ではなく、「短時間でこまめに」がGood!

まずは教師と子ども、そして子どもと子どもがつながっていくために、教師が子どもたちと一緒に遊ぶこともよいですね。



実践ポイント

- 注意は端的に
- 認める場面を仕組む「お手伝い大作戦」



実践事例 三



注意は端的に

小 中

長々と注意をしたり、過度に反応したりせず、端的に注意をする。



はじめは私の反応を見て楽しんでいたが、徐々に自分で気付き、やめるようになった。

長々と注意をするよりも効果的！



認める場面を仕組む「お手伝い大作戦」

小 中

離席して友達の邪魔をしたり、色々なものを口に入れたり、友達の反応を見ながらしつこく繰り返す子どもに、休み時間や授業中に配りものを頼むなど、「ありがとう」と伝える場面を作る。



褒められたり、感謝されたりすると、そこからしばらくの間は行動が落ち着くことが多い。

褒められて特にうれしそうな様子を見せることはないが、他者から承認されたい気持ちは強いので、2学期もその子どものよさを引き出せるような取組を行いたい。



Good Point!



「不適切な行動を減らす」から「適切な行動を増やす」へ

教師や周りの子どもたちの反応を見て行動している場合は、「長い注意」ではなく、「端的な注意」の方が効果的なようですね。また、「お手伝い大作戦」で褒めるチャンスを増やしたり、認める機会をたくさん作ったりして、よい行動をすると注目してもらえするというプラスの体験を積み重ねていくことで、改善につながりますね。

実践ポイント

- 落ち着ける場所を一緒に見付ける



40 物を窓や階段から落とす子

実践事例 三

- ✓ 落ち着ける場所を一緒に見付ける

小 中

怒ったときに、物を落とす以外にどうしたらよいかを子どもと一緒に考え、落ち着ける場所として、廊下の端を選んだため、その場所に座ることをルールとして決めた。



自分で決まった場所に行って気持ちを落ち着かせることは難しいが、教師が決まった場所に誘導すると、物を投げることなく、その場所で気持ちを落ち着かせることができるようになってきた。

自分自身ではまだ感情のコントロールが難しいため、何度も繰り返し粘り強く取り組んでいきたい。



Good Point!



自分で「怒り」をコントロールすることができるような支援を！

「怒り」に対応する方法を一緒に考えて、自分で決めさせることで行動につながっていますね。子どもも「困っている」ので、子どもの気持ちに寄り添って、支援をしていきたいですね。アンガーマネジメントのロールプレイを実践してみるのも一案です。



実践ポイント

- 落ち着く方法を一緒に考える



実践事例 三



✓ 落ち着く方法を一緒に考える

小 中

しんどくなったり頭がカーっとなったりしたときに落ち着く場所を確認する。また、そのような行動を見つけたときは、すぐに近づくと体が反射的に逃げてしまうので、まず端的に危険回避の指示を出して、子どもからこちらに来られるように話をする。



自分からクールダウンをしに行ったり、声をかけると落ち着いてその行動をやめてこちらに来て話ができたりするようになってきた。突発的な行動は、以前に比べて少なくなり、その行動が危険であることは分かってきたようだ。

手立ては続けていきたい。今後は突発的な行動をしてしまうパターンの実態把握をして、予防をしていきたい。そして、本人にも自分の行動の見える化で自分のことを知ってもらい、その状態に合わせた行動を一緒に考えていけるようになったらと思う。



Good Point!



クールダウンの方法を一緒に考えて、「よい行動」を強化!

クールダウンの方法や危険な行動について一緒に考えることで、意識させることができているですね。子どもも「困っている」ので、落ち着いて話ができるときに、危険な行動をせずにクールダウンできる方法を一緒に考え、できたら褒めて認める。この繰り返しで、よい行動を増やしていきたいですね。

パニックになるきっかけは何なのかについて、記録・分析することで、パニックを防ぐことにもつながりますね。

実践ポイント

○ 「共感」と「教師の指示・発言の改善」



実践事例 三

✓ 「共感」と「教師の指示・発言の改善」

小 中

不平不満が出たときに、「確かに大変だね」「その気持ち分かるよ」などと共感する。また、課題を出すときには、一気に出すのではなく、小出しにしてステップを踏ませる。



声を大にして「めんどくさい」「やりたくない」と不満を言う子どもは少なくなった。しかし、問題が分からない、できないときに不満を言う子どもがいる。

する前に不満を言う子どもは少なくなったので、している最中に不満が出たらその子どものそばに行って話を聞く。



Good Point!



「不平・不満」は教師の改善のヒントであると、捉える

子どもの「不平・不満」は、教師にとっては、とても大事な発言です。その「不平・不満」をしっかりと受けとめ、原因を探ることが一番大事ですね。教師側が「何を変えればよいか」という視点をもつだけで、その原因となることの改善点を見いだすことができます。「子どもを変える」のではなく、「自分が変わる」という考え方は、いろいろな場面で生かすことができますね。

「また○○かよ」など不平不満が多い子



実践ポイント

- 教師の自己開示
- ありのまま受け止める



実践事例 三



教師の自己開示

小 中

朝の会や帰りの会などで、教師自身の失敗したことや、悩み事、困っている事を学級に相談をする。



励ましてくれたり、悩み事を一緒に考えてくれたり、お手伝いして助けてくれたりする行動や言動が見られた。

教師自身が自分のことをオープンに話すことで、「教師として指導しなくては」という意識が少し変わってきた。自分の考え方や行動を変えることで、子どもたちの態度も変わってきたのでうれしかった。



ありのまま受け止める

小 中

相手の思いにできるだけ寄り添って話をする。子どもが思っていること、考えていることをありのまま聞き、これからの方法を一緒に考える。



始めは表情も厳しく、他者への不信感しかなかったが、何度も話をしたり、一緒に活動したりすることでだんだんと周囲の人を大事にしようという意識をもち始めた。

子どもの心を知るには、時間がかかる。しかし、時間をかけて関わることは最も大切なことであると思う。



Good Point!



「教師が指導」から「教師も一緒に成長」へ！

「教師は指導するもの」という考え方から「教師も一緒に成長する」発想への切り替えをすることで、「上から目線」ではなく「同じ目線」で子どもたちと接することかできるようです。教師自身が「悩み」や「困り感」を伝え、ありのままの自分で子どもたちと接することが信頼関係を築くことにつながりますね。大人も子どももありのままを受け入れることで、お互いの心を開くことができるでしょう。

「ほんの少し変えてみた」あるある項目トップ 10

No.	あるある項目	報告数
1	17 取りかかりに時間がかかる子	37
2	2 指示が通らない学級	35
3	29 整理整頓が苦手な子	30
4	7 学習規律が身に付かない学級	28
5	3 私語が多い学級	26
6	4 教師の話が聞けない学級	25
7	9 意欲が低い・無気力な学級	23
8	52 自己肯定感が低い子	20
9	6 雰囲気を壊す行動をする子に我慢している学級	18
10	8 集中して学習することが難しい学級	18

「はじめに」や「おわりに」にもありますように、この冊子は初任者・2年経験者・3年経験者研修対象者の先生方の貴重な471の実践から生まれたもので、上の表はそのうち報告数の多かったものを掲載しています。特に上位に載っているものはどれも「確かにこれあるよね」と納得できるものばかりです。

実践事例を提供してくれた先生は、これらの悩みが生じたときに「できないのは子どものせい」とするのではなく、『ほんの少し変えるだけでうまくいく～学校あるあるヒント集～』を開いて、「どうすればできるようになるかな」と考えながら実践したことだと思います。

困ったときは成長できるチャンス。『学校あるあるヒント集』にプラスして、この『実践事例集』も手元に置いて、困ったときにはすぐに開いてみる習慣を身に付けませんか？

おわりに

夏季休業中のある日。初任者・2年経験者・3年経験者の研修を受講する先生方の机上にはたくさんの付箋が貼られた『ほんの少し変えるだけでうまくいく～学校あるあるヒント集～』の本が置かれていました。中には、本文中にも書き込みや付箋が貼られて冊子が厚く膨らんでいるものも見受けられました。教育委員会が刊行した冊子を198人の初任者・2年経験者・3年経験者の先生方が、学級経営や授業づくりの道しるべとして、日々の実践の中で活用してくれたことへの感謝の気持ちで胸が熱くなったことを思い出します。

教育委員会では今までに数々の冊子を刊行してまいりましたが、先生方の手元に届いた後の活用については十分な発信がなされておりません。昨年1月に刊行いたしました『ほんの少し変えるだけでうまくいく～学校あるあるヒント集～』は、県内の他市町村や県外の教育関係者から高い評価を得ていますが、一人1冊ずつ手元にこの冊子がある高知市内の先生方がどれくらい活用してくれているかについては把握ができておりませんでした。そこで、学級経営や授業の場面で苦戦することの多いであろう、初任者・2年経験者・3年経験者の先生方に積極的に使ってもらうために、悉皆研修の課題として本冊子の活用を位置づけました。

その結果、198人の研修対象者の先生方から全部で471の実践事例が集まりました。これは私たちの予想をはるかに上回る数値です。

研修会の中でタブレットに打ち込まれていく実践事例の数がステージのスクリーン上でどんどん増えていく画面を、「すごいなあ、若年の先生方もなかなかやるなあ」と感激しながら見ていました。

この冊子に掲載しております実践事例は全て、その日の研修会で打ち込まれた471の事例から抽出したものです。実践してみて、手ごたえを感じたものや、どうもうまくいかなかったから今度はこんな工夫をしてみたいというものまで、55のあるある場面のうち46の場面について実践事例を掲載しています。

編集する過程において全ての実践事例を読み進める中で、高知市の教育（学校）の未来は捨てたものではない、若い先生たちにバトンを渡しても大丈夫だと感じました。この冊子に掲載している実践の先には、子どもたちの笑顔があり成長した姿があります。昨年1月に発行した『ほんの少し変えるだけでうまくいく～学校あるあるヒント集～』とセットでいつも手元に置き、困ったときにすぐに手に取って活用していただけることを祈っております。

令和5年1月

高知市教育研究所 教育支援センターみらい 吉本 恭子

実践提供者

令和4年度 高知市立小・中・義務教育学校

初任者研修受講対象者 62名

2年経験者研修受講対象者 73名

3年経験者研修受講対象者 63名

作成者

編 著	吉本 恭子	高知市教育研究所
執 筆	岩松 淑恵	高知市教育研究所
(五十音順)	佐藤 真野	高知市教育研究所
	堀 美香	高知市教育研究所
イラスト	内田希良子	高知市教育研究所
D T P	濱田 博幸	高知市教育研究所
編集協力	越智 知恵	高知市教育研究所



ほんの少し変えるだけでうまくいく

～学校あるあるヒント集～ 実践事例集

2023年（令和5年）1月発行

発行所	高知市教育研究所
所在地	〒781-8010 高知市棧橋通二丁目1-50
電 話	088(832)4497
F A X	088(832)6715
E-mail	kc-201700@city.kochi.lg.jp